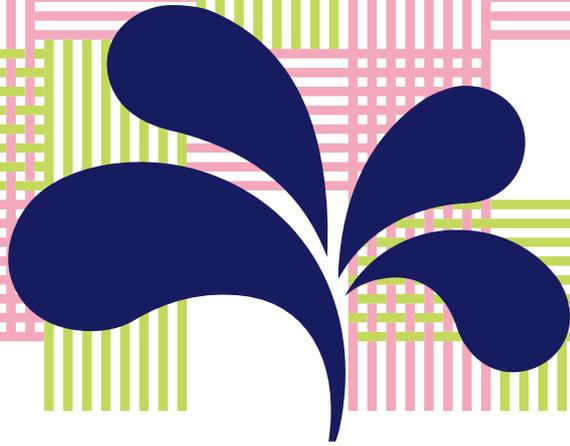


日本の心を世界に伝える  
*Conveying the Spirit of Japan*



第15回 文化庁文化交流使活動報告会

# 文化庁文化交流使 フォーラム 2017

Japan Cultural Envoy Forum 2017

報 告 書



第15回 文化庁文化交流使活動報告会

# 文化庁文化交流使 フォーラム 2017

Japan Cultural Envoy Forum 2017

— 日本の心を世界に伝える —  
*Conveying the Spirit of Japan*

報 告 書

## 目 次

文化交流使事業概要	P.2
文化庁文化交流使フォーラム 2017 議事録	P.5
活動報告	
プロフィール	P.18
佐藤 可士和	P.20
佐野 文彦	P.22
土佐 尚子	P.24
藤間 蘭黄	P.26
柳家 さん喬	P.28
山田 うん	P.30
文化交流使一覧	P.32





文化庁では、芸術家、文化人等、文化に関わる方々を一定期間「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を展開しています。文化交流使は、諸外国に一定期間（1か月～12か月間）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーションなどを行います。

平成28年度までに、伝統音楽や舞台芸術、生活文化やポップカルチャーといった多様な分野で活躍する芸術家、文化人等、延べ128人と、26組（団体）を81か国以上へ派遣しています。平成28年度は、下記の芸術家、文化人を「文化交流使」に指名しました。

Since 2003, the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan has sent artists and other cultural figures abroad to serve as “Japan Cultural Envoys,” with a view to deepening the international community’s understanding towards Japanese culture, and to forming and strengthening networks with people around the world active in the cultural arena. The Envoys stay in one or more countries for a specified period (between one month and one year) where they conduct lectures, courses, demonstrations or other activities in their cultural fields.

By the end of fiscal year 2016, a total of 128 individuals, and 26 groups specializing in various fields such as traditional music, performing arts, culture and lifestyle, and pop culture has been sent to more than 81 countries. The following artists and cultural specialists were appointed as Japan Cultural Envoys in FY2016.



**5 柳家 さん喬 Sankyo Yanagiya**

落語家

活動期間 平成 29 年 2 月 5 日～ 3 月 6 日

活動国 アメリカ、カナダ



**6 山田 うん Un Yamada**

振付家、ダンサー

活動期間 平成 29 年 3 月 29 日～ 9 月 30 日

活動国 イスラエル、ジョージア、エストニア、アルジェリア、イギリス、ベルギー、スペイン、スリランカ、マレーシア、オーストラリア、アメリカ

撮影：宮川舞子



# 文化庁文化交流使フォーラム 2017

## 議事録





山田うん氏によるオープニングアクト（第1部）

## 開会挨拶（文化庁長官代理）

中岡 司 文化庁次長

本日は、文化庁文化交流使フォーラム 2017 に各国駐日大使館をはじめ、多くの皆様にご参加いただきありがとうございます。これまで本事業では、延べ128名・26団体の方々が81か国以上において日本の洗練された文化と、それを育んだ心を世界へ伝える交流活動に貢献してくださっています。

本フォーラムでは、俳優として活躍されている榎木孝明さんをモデレーターに迎え、2016年度の文化交流使として活動された6名の皆さんに、その成果をご発表いただきます。活動発表をご覧いただき、文化交流における第一線の現場を感じ取っていただければと思います。

わが国は2020年、東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控えています。私たち一人ひとりが文化交流への理解を深め、日本国内において対面で、あるいはSNSやインターネットを通じて日本文化を伝えていくことも文化交流の一つの姿といえるでしょう。本日のフォーラムが、皆様にとって日本文化への理解を一層深める機会になるとともに、日本と諸外国を結ぶ一つのきっかけになることを強く願っています。



中岡文化庁次長による開会挨拶

## 活動報告

### 山田 うん 振付家, ダンサー

ダンスとは、踊った瞬間に生まれて消えゆくものであるが、振付はフレームとして残っていく。世界のどこで何が生まれ、何が消え、何が残るか。私は、そこに重きを置いて11か国・23都市を旅した。

まず、伝統的なグルジアダンスがコンテンポラリーダンスのように積極的に新しい発想を取り入れ、伝統と現代をアクロバティックに融合させ、世界中で愛されていることに魅力を感じ、ジョージアへ行った。様々な国の文化が混ざり合って“いいとこ取り”しているジョージアの食べ物やワインは、世界で一番おいしい。国立バレエ学校や国立バレエ団や国立劇場での私の活動は、テレビをはじめ色々なところで紹介していただいた。

次に、ムスリムの国であるアルジェリアを訪れると、まるで違う世界にポンと投げ込まれたような印象を受けた。石油や天然ガス等の資源に恵まれたこの国では、豊かな文化芸術活動が繰り広げられている。国立の舞台芸術大学やバレエ団と交流し、飛び入りで振付のアドバイスなども行った。アルジェリアの国立劇場には、入口に有名な俳優たちの写真が並んでいたが、そのほとんどはテロで亡くなったという。

エストニアに着くと、70年ぶりの寒波。タルトゥの国立博物館やタリンのパバラバでカンパニー公演、タリン大学でワークショップを行った。この国は合唱が盛んで、スタジアムで合唱の祭典が伝統的に行われている。その後、イスラエルへ行き、現地の若手ダンサーたちと共同制作で新作を作り、スザンヌデラルセンター内で公演し、大使館でレクチャーを行った。

英国のダンスのメッカ、サドラーズウェルズではアクラム・カーンのリハーサルと本番に赴いた。また、ロンドン



山田氏の発表

オリンピックの跡地を利用したウィン・マクレガーのスタジオを訪問した。そしてベルギーではオランダ在住の楠田健造氏と新作デュエットを制作。昨日、横浜で公演を終えたところである。

灼熱のスペインでは、川合ロン氏と2つのダンスフェスティバルでデュエット作品を披露した。野外劇場だった。次は象の国、スリランカである。コロンボではスリランカ軍の劇団員たちや芸術大学の学生たちに踊りを指導し、合同公演も行った。キャンディでは象とダンサーが一緒になって踊るペラヘラ祭を視察した。さらに次はマレーシアへ。コタキナバルのサバの水上集落等で共同制作舞台の美術や衣装のリサーチを行った。その成果として、クアラルンプールで10月に11人のマレーシア人と5人の日本人キャストで『People without Seasons』（季節のない街）を発表した。

### モデレータープロフィール

#### 榎木 孝明 俳優

1956年、鹿児島県出身。武蔵野美術大学デザイン科に学んだのち、劇団四季入団。1981年『オンデューズ』で初主演。1983年劇団四季を退団し、翌年のNHK朝の連続テレビ小説『ロマンス』の主演でテレビデビュー。以後、映画『天と地と』、テレビ『浅見光彦シリーズ』『NHK大河ドラマ』、舞台などで活躍。絵と旅を好み、アジア各地を中心に世界の風景を描き続けている。





榎木氏によるインタビューに応じる山田氏

そして、オーストラリアのダーウィンフェスティバルへ。アボリジニの文化やメルボルン、シドニーのコンテンポラリーダンス発信地をリサーチ後、ハワイへ飛ぶと、ハワイ大学でワークショップを行った。最後はニューヨークブルックリンに2週間滞在して作曲家 高橋幸世とオブジェクトダンスを発表。こうして23都市を巡る6か月の一人旅が終了した。

エネルギーの大きさは、経済力や歴史ではなく身体の強さである。そこに魅かれ、私は旅をした。文化や経済の影響を受けながら、全ての土地で人々がどのようなマーケットを作り、どのような伝統をなくし、あるいは救い、コンテンポラリーダンスとして現代に訴える力強い表現を生み出しているのか。それを全身で学び、伝え、交換している間に、一緒に料理を作ったような気持ちになって帰国した。

帰国して1か月ほど経って改めて眺めると、今ここに立っている自分が360度囲まれていることを実感する。今、夜の国もある。春、夏、秋、冬の国がある。手は届かないけれども、足の先がつながっている感覚でこれから踊りを作り、思想を深め、何を生んで何を残していこうか。それを考えながら、創作活動に励んでいきたい。

**榎木** オープニングアクトの振付は、いつ考えたのか。

**山田** 今。

**榎木** 今！瞬間芸みたいなものですね。ところで、「うん」という芸名の由来は？

**山田** 昔から「うんちゃん」と呼ばれていたため。海外でも「ウン」と呼ばれるが、発音しにくい言語が多いようである。

**榎木** 文化交流使に指名されたときの気持ちは。

**山田** まずは地球儀を見て、どこへ行こうかなという気持ちになった。

**榎木** 訪問国は自分で決めたのか。

**山田** 自分でEメールやレターをたくさん送り、受入先を見つけて行った。

**榎木** 言葉には困らなかったか。

**山田** ほとんどは、英語とフランス語で何とか言った。踊りで伝わることもあるため、言葉だけを頼りにしていたわけではない。

**榎木** コンテンポラリーダンスというジャンルは、各国にあるものなのか。

**山田** 世界中にあるが、国、風土、文化、伝統によって形が全然異なる。日本のコンテンポラリーダンスは珍しかったようで、興味を持って受け入れてもらった。

**榎木** 今後の抱負は？

**山田** 一つに絞れない。ダンスでも、一つの所作に100の理由がある。短時間では言い切れない。

---

## 佐野 文彦 建築家、美術家

私は、もともと茶室や料亭を作る数寄屋大工として弟子入りし、職人となってから、家具を作ったり、設計事務所に勤めたりしながら、現在は建築家や美術家として活動している。小屋は、文化を映す鏡といえる。文化庁が文化交流使として建築家を派遣するのは初めてということで、自分が何をしたいかと考えた時、ローカルの技術、材料、人々と日本の技術を混ぜ合わせた作品を作りたいと思った。職人をしていた頃、日本は様々な技術や素材を失ってしまったと感じていたため、その失ったものを見るべく色々な国へ行きたかった。そして完成した小屋を使い、形式化した茶の湯ではなく、現地の人々に人をもてなす会を開いてもらうというプロジェクトを計画した。

実際、敷地や材料、加工機械や手伝ってもらう人、予算の話し合いをするために、16か国・32都市を回った。ベルギーのブリュッセルでは、200年前に建てられた古い建物に使われていたようなセカンドハンドの材料を使ってインスタレーションを作り、現地の陶芸家に茶会を開いてもらった。私は、普段から「日本的空間とは何か」を考えながらものを作っている中で、「境界線が曖昧な場」を意識している。

その後、マレーシアのランカウイ島へ行き、カンボンハウスといわれる現地の小屋を現地の職人と一緒にリノベーションした。やはり「境界線が曖昧な空間」を作り、現地流のラフなパーティを行った。

フィリピンでは、今回のテーマに一番近いプロジェクト

ができたと思っている。ネグロス島で地元の人々に手伝ってもらいながら、現場でヤシの木を切り倒し、角材にカットして材料にして建物を作っていた。現地に到着したのは年末の12月22日であったが、年明けの1月2日早朝、市長と副市長、近所の人々と一緒に、ブタの丸焼きを囲んでオープニングパーティを迎えることができた。

オランダのアムステルダムでは、ホテルをリノベーションすることになった。セカンドハンドの材料を集め、現地のアーティストと一緒に畳を作る他、もともと古くから使われていた面と新たにカットした新しい面が見えるような空間とした。迎えたオープニングレセプションではお茶会を催し、駐オランダ日本国大使、ゴッホミュージアムのキュレーターをはじめ500人もの人々が集まってくれた。

エチオピアにおいては、現地にあった素材を用い、現地のもてなしの形であるコーヒーセレモニーを行う小屋を建てるワークショップを実施した。

韓国では、済州島において、現地のかやの木を用いた建物を建て、あわせて四季を楽しめる造園を行った。

こうした文化交流使としての活動をきっかけに、Design Miami/Baselで展示を行うことになった。シオルテン&バーイングスというアムステルダムのデザインデュオと一緒にテポラリーな茶室を作り、有田焼を使った茶会を開催した。また先日は、バリで13人の女性アーティストと展示を行った。

私は、壇上でデモンストレーションをすることはできないが、世界中で日本的な空間について説明しながら語り合い、作ったものが残り続け、色々な人に影響を与え続けられれば嬉しく思う。さらに5年後、10年後、自分たちの残してきたものがどのように変化し、どのような影響を与えるのか。また、見られることを楽しみにしている。



佐野氏の発表

**榎木** 16か国という多くの国を訪問されたわけであるが、自分で決めたのか。

**佐野** 自分で希望した。クリエイティブな仕事をしている知人に相談したり、以前からオファーを受けていた場所に連絡を取ったりして決めた。

**榎木** 数寄屋建築とは？

**佐野** 書院造りから現代の住宅建築まで変遷があり、括りが難しいが、大まかにいうと、丸太など皮が付いたままの材木・竹を使った日本建築の様式である。

**榎木** 一つの国に滞在する期限はあるのか。

**佐野** ビザの問題はあったが、フィリピンの小屋は10日間、アムステルダムのホテルは19日間など、かなりタイトなスケジュールで完成させた。

**榎木** 何を作るか、その国へ行ってから計画するのか。

**佐野** そうである。現地に着いて、お金も場所もない状態から打ち合わせ、プランを作成して、相手に乗ってくると実際に次に進んで図面などを作成する。

**榎木** 国によって、時間の概念が違ったことは？

**佐野** 日本人の感覚でいると、ものがほとんど出来ないの、寛容さが必要であり、時間についても差があると思った。

**榎木** 最後に自分の建てた茶室でお茶をする時の気分は？

**佐野** 全部終わって、よその人のような気持ち。遠くから見ているような感覚になる。

**榎木** 今後、やりたいことは？

**佐野** 自分が死んでも残る仕事をしたい。文化財の仕事をやりたい。



佐野文彦氏の発表

## 土佐 尚子 アーティスト、京都大学教授

私は、「Looking for Japan ～日本を探して～」をテーマに世界を回った。東へ、西へ、おそらく地球2周はしたのではないだろうか。6か月の旅であった。最初は、イギリスのロンドンで展覧会を開催した。展示作品については、昨年、京都で開催されたスポーツ・文化・ワールド・フォーラムのオープニングで上映した、日本の伝統的顔料や様々な液体を使い、ハイスピードカメラで撮って見えてくる世界を映像化した作品があり、それを各地で展示した。また、京都の建仁寺に特別奉納したデジタルフォトグラフィの掛軸なども展示した。

ロンドン大学ゴールドスミス校では、講演を行ったことをきっかけに、その1年後に京都大学がアートに関する国際シンポジウムを開催。両大学の総長が出席し、京大とロンドン大学ゴールドスミス校が学術交流協定（MOU）を締結することができた。

次にフランスを訪れ、パリ日本文化会館で講演を行った。ここでは、琳派400年祭の話をした。2015年、京都で琳派400年祭が行われた際、私は京都国立博物館でプロジェクトマッピングを行った。俵屋宗達の『風神雷神図』をもとに、日本文化と新しい技術を融合した作品である。そして2018年は、ジャポニスム2018という大規模なイベントがフランスと日本で行われる。同時に2018年は京都・パリ友好60周年記念にあたり、色々な企画が協議されているところである。フランスでの活動を通じて、そのような話につながった。

ニューヨークでは、総領事館のビル内にあるギャラリーで展覧会を行った。次に、シンガポールを訪れ、ジャパン・クリエイティブ・センターで講演し『Sound of Ikebana』の



プロジェクトマッピングの紹介を行った。シンガポールには四季がない。そこで、日本の色で四季を表現した作品を展示しながら語った。アナログの自然の中には、美しいものがたくさん隠れている。私たち日本人は、生け花もそうであるように「自然の生け捕り」を好むようである。シンガポールでは200インチ4面というスクリーンで個展を開き、ロサンゼルスにおいても、アートサイエンスセンターにおいてギャラリー展示を行った。

フィリピンでは、ユチェンミュージアムにおいて初となるデジタルアートの展覧会を開催。ラ・サール大学で「先端技術で生け捕られ見えてくる日本美」について講演を行い、その後、ニュージーランドにおいても、各地で講演会や展示会を催した。

最後に、ニューヨークのタイムズスクエアで『Sound of Ikebana』が每晚11時57分から3分間、1か月にわたって上映された。私はニューヨークとつながりが深く、20代の頃に作ったビデオアート『An Expression』が2011年、MoMAのコレクションとなった。その選定に携わっていた当時MoMAのシニアキュレーターだったバーバラ・ロンドン氏（現在はイエール大学教授）と久しぶりに再会し、交流を深めることもできた。さらに、高橋在ニューヨーク総領事大使の公邸で講演をする機会があり、能プロジェクトマッピング『井筒』を上映。他に、ニューヨークのジャパン・ソサエティでも展示を行った。



土佐尚子氏の発表



榎木氏によるインタビューに応じる土佐氏

**榎木** パネルの現地調達など、相当お金がかかるのでは？

**土佐** お金はかかる。スポンサーがいなければ芸術はできない。

**榎木** 「Looking for Japan ～日本を探して～」と言われたように、やはり根底には日本文化があるのか。

**土佐** 「自然を生け捕る」ということが日本の美の根底にある。一方、とくにニューヨークやロンドンなど、美術史を作ってきた文化の人たちは、自然を生け捕るだけでなく、そこに人間の営みがなければ芸術とは言わないと考えている。そこに気がついた。

**榎木** そのような文化の違いに一線を引く瞬間があるのか。

**土佐** 一線を引いたら文化交流にはならない。その特徴がプラスに働くような形になることをこれからも研究していきたい。

**榎木** 今後の目標は？

**土佐** 東京オリンピック 2020 で歴史に残るような文化イベントをやりたいと思う。

---

## 藤間 蘭黄 日本舞踊家

「日本舞踊は、歌詞に乗ってパントマイムのように振りごとをしていくのが特徴の一つである」ということを知ってもらうために、歌詞の意味とその動きについて具体的に説明した後、実演をする。3月末から7月末までの4か月間、このようなレクチャー & デモンストレーションなどを10か国・14都市で行ってきた。

日本を出発し、祖母の門弟で80代になる日系1世の方々が待つホノルルを皮切りに、シアトル、ニューヨーク、さらに欧州各都市を巡り、ナポリからソウル経由で帰国した。これらの場所で、公演、ワークショップ、デモンストレーション、また帰国後の公演のためのリハーサルなどを実施。公



藤間蘭黄氏によるオープニングアクト（第2部）



藤間氏の発表

演では、歌舞伎舞踊の『山帰り』をはじめ『都鳥（みやこどり）』など、色々な演目を用意した。

プラハでは、ラグビー場でのジャパNDERのイベントに呼ばれ、青空の下、芝生の上に絨毯を敷いて踊った。さらにキエフでは、遺跡「黄金の門」に特設した舞台でムソルグスキーの『展覧会の絵』を世界初演した。これは私が5年前から夢見ていた計画で、この文化交流使に指名されたことで実現することができた。公演翌日には、特設巨大ステージでも一部を上演した。

ワルシャワの日本祭りでは、屋内での公演とともに野外ステージでワークショップやレクチャー&デモンストレーションを行った。チェコ、ポーランド、ハンガリー、スロベニアといった中・東欧諸国では、日本のアニメが現地語の字幕付きで放送され、耳で聞く日本語の美しさに魅かれて日本語や日本文化への興味が高まり、伝統芸能への関心が強くなっている。こうした日本のファンの方々に、正統な日本舞踊、日本の伝統を見せることの重要性を強く感じた。

ロシアのサンクトペテルブルクでは、帰国後に日本で上演した『NOBUNAGA-信長-』のリハーサルをロシアのバレエダンサー ファルフ・ルジマトフ氏、岩田守弘氏と行った。

最後に、驚きのエピソードを一つ。実は50年ほど前、私がまだ5歳だった頃、父の仕事の関係で半年間、母と弟とともにニューヨークに滞在したことがある。当時、母である藤間蘭景は、ニューヨークで初めて日本舞踊のリサイタルを開催している。そんなエピソードをジャパン・ソサエティーの方々と話していたところ、後日「ありましたよ」とニコニコして出してくれたのが、50年前の公演プログラムや写真、新聞評の切り抜き、彫刻家の棟方志功氏と母のツーショット写真であった。その出来事が母の3回忌、しかも命日の3

日後にあったということで、不思議な縁を感じた。

この4か月は、本当に内容の濃い日々であった。日本舞踊家としての誇り、使命感、責任なども改めて考えさせられた期間であった。かけがえのない経験をさせていただいたことに心から感謝するとともに、これからも日本舞踊家として精一杯、邁進してまいりたい。

**榎木** 私は武術を長年やっており、日本人の正中線意識を大事にしたいと思っている。先ほどのオープニングアクトを見て、見事な正中線だとつくづく感心した。残念ながら、そうした「<sup>はら</sup>肚文化」がどんどん失われつつあると思う。

**藤間** その通りである。鼻緒の付いている履物の場合、歩くときに前向きに重心を保たなければ脱げてしまう。

**榎木** 海外の正座もしたくないような国で教えるにあたって、大事なことはあるか。

**藤間** やはり体重の位置である。洋服文化の国では、かかとに体重を乗せる。しかし日本舞踊では、前かがみで親指の付け根に体重が乗るように立つ。

**榎木** 文化交流使として、やりたいことは達成できたか。

**藤間** キエフでピアノ生演奏による『展覧会の絵』を世界初演できた。以前、子どもの頃から好きだった『展覧会の絵』の楽譜を取り寄せ、邦楽版に編曲してリサイタルで発表したことがある。それを「黄金の門」で上演したいと願っていた。やはり夢を実現するには、口に出して話していくものである。色々な縁がつながり、ピアノ版での実現の運びとなった。



榎木氏によるインタビューに応じる藤間氏

## 佐藤 可士和 クリエイティブディレクター

今回、クリエイティブディレクターとして初めて文化交流使に任命された。新しい概念であるクリエイティブディレクションを日本文化として認めていただき、それを世界に発信するというので、責任感を持って色々なところを回ってきた。どこへ行こうかと考えた時、やはり最先端かつど真ん中の場所で意見交換をしたいと思い、ニューヨーク、ロンドン、パリを訪れた。

自分の名前に「士」という漢字が入っていることから、僕は「SAMURAI」という事務所で様々な企業のブランディングをやっている。その話から始め、「ICONIC BRANDING」という考え方をレクチャーした。

まず THE ICON=LOGO, アイコンといえばロゴということで、今治タオル、カップヌードルミュージアム、国立新美術館、東京都交響楽団などのロゴを手掛けてきた。

THE ICON=PRODUCT の事例として、ユニクロでは、ショッピングバッグをはじめ店内で使うものを全てアイコンとしてデザインしている。TSUTAYA TOKYO ROPPONGI や明治学院大学、セブンイレブンのセブンカフェなども同様である。

次に THE ICON = SPACE, スペースもアイコンになる。今治タオル本店は、織機をイメージしてデザインした。楽天本社オフィスや極真空手の道場なども重要なアイコンとなっている。THE ICON=ARCHITECTURE, 建築もアートのインスタレーションのような考え方でアイコンとなる。THE ICON = CITY と捉え、まちの風景をアイコンにするキャンペーンを世界で展開したのが、ユニクロである。ニューヨーク店を立ち上げる際には、ニューヨーク中をユニクロのグラフィックでジャックした。

このように、あらゆるものをアイコンとして捉える ICONIC BRANDING を行っている。さらに、八代目中村芝翫製名披露や有田焼創業 400 年事業といった日本的な事例も織り交ぜながら、文化交流使として各地でレクチャーを行ってきた。

有田焼のプロジェクトが評判を呼んだため、さらに 8 社の窯元とコラボレーションし、同じ手法で色々なものに絵付けを行った作品を展示した。複数社のものが一堂に会して一つのシリーズになることは今まであり得なかったことではあったが、一つのメソッドで括ることで一つの事例になる。THE ICON=METHOD, つまり方法論もアイコンになっていく。

ニューヨーク、ロンドン、パリで行ったレクチャーは非



佐藤可士和氏の発表

常に盛り上がり、面白いディスカッションができた。各地で、世界の最先端で活躍するファッションデザイナー、建築家といったクリエイターたちと交流。かなりたくさんの人とディスカッションした。国内外のメディアにも多数取り上げられ、複数の雑誌などで文化交流使の活動を中心に特集を組んでいただいた。各国駐在大使やクリエイターとの対談も記事として掲載されている。

クリエイティブディレクションという僕の仕事は、ビジネスをクリエイティブの力を使って社会に展開していくという新しい概念である。それを一つの文化として、全てをアイコンとして捉える ICONIC BRANDING という考え方自体、日本的といえる。それを伝えていきたいと思い、文化交流使として多くの人とレクチャーやディスカッションを行ってきた。

**榎木** 佐藤氏の作品を見ていると、日本文化が根底にあると感じる。

**佐藤** 普段は意識しているわけではないが、海外でまとめて見た時、すごく日本っぽいなと自分でも気づいた。

**榎木** 国によって反応は違うものか。

**佐藤** 結構、違って面白かった。傾向として、ニューヨークはビジネス寄りの質問が多かった。パリは文化に特化しており「歌舞伎や有田焼といった伝統をどう革新していくのか」「伝統に対し、デザインがどのように作用するのか」「どこを変えて、どこを変えてはいけないのか」など、伝統と革新に興味があるようで面白かった。英国は、オーディエンスがデザインのスペシャリスト達だったので、また違った反応だった。

**榎木** 次の展開は？



榎木氏によるインタビューに応じる佐藤氏

**佐藤** 日本のブランド価値が向上するお手伝いをしたい。文化交流使の活動を通し、伝統と新しい文化を発信するお手伝いができればいいと思った。

**榎木** 伝統工芸、伝統芸能の継承が問題になっている中で、こういう形で日本文化を根底とした次の新しい展開が見え、非常に頼もしく思った。

---

## 柳家 さん喬 落語家

今日、皆さんのご報告を聞き、日本の文化は自分が思っていたよりも、はるかに広くひろがっているのだなと思った。私は、文化交流使に指名いただき、どのような活動をすればいいのかと考えた。「日本語が乱れている」というと失礼な言い方になるが、今の日本人は右を向いても、左を向いても「ヤバイ」という言葉でしか表現できない。ラーメンを食べても「美味しいね」と言えず、「ヤバイ」で終わってしまう。本来、持っている日本語の美しさが損なわれているようである。そこで、落語を通して日本語の楽しさや美しさを皆さんに分かっていただければ嬉しいと思い、活動に参加した。

私は、弟子の喬之助とともに米国やカナダの大学を訪れ、授業の中でレクチャーやパフォーマンスを行った。ボストン、トロント、ロサンゼルス、ホノルルなどの6都市を1か月で巡り、ワークショップや落語公演、日本語学習者への小噺の実演を通して日本語の楽しさを学んでもらった。何より疲れを癒してくれたのは、真剣に臨んでくれる学生たちをはじめ、熱心に聞いてくださる皆さんの前向きな姿勢であった。

ボストンでは、高等学校からハーバード大学、在ボストン日本国総領事館などで公演を行った。カナダのトロントでのワークショップでは、普段あまりコミュニケーションをとらない異なる人種の学生たちが日本語の落語を通じてケラケラ笑い合い、アドバイスをするなど、声を掛け合っている様子を見て嬉しくなった。日系文化センターでの公演には400名の予約が入っていたが、大雪に見舞われて交通がストップしてしまった。しかし開演したところ、ほぼ満席の状況であった。多くの人々が日本の文化に興味を持ち、雪の中来てくれたのだと感動した。

公演が終わると1人の日系三世の男性がやって来て、「私は、もう日本語をうまく話せないけれども、今日の公演を聞いて日本人であることに誇りを持ちました」と言って帰っていった。雪の中を来てくれたばかりでなく、涙が流れるほど嬉しい言葉を投げかけていただき、自分が文化交流使として活動する大事な意義を感じた。

デトロイトのミシガン大学ではワークショップを行い、私たちの公演前、浴衣を着た学生たちに小噺を演じてもらった。最後に一般公演を行ったところ、やはり満席で椅子がなく、床に新聞紙を敷いて真剣に聞いてくださった方もいた。司会を務めた女子学生は、それまで日本文化を学んでいることに批判的だった両親が公演を見て、「お前は、素晴らしいことを学んでいるんだね」と初めて褒められたと涙を流しながら教えてくれた。

ロサンゼルスでは日本人でありながら、日本語を忘れた子供たちに公演をしたところ、皆ゲラゲラ笑ってくれ、日本語は忘れていないのだと感じた。

パデュー大学は、多くのノーベル賞受賞者を輩出する大学である。ここでは、質問の多さに感じ入るものがあった。



柳家さん喬氏の発表



榎木氏によるインタビューに応じる柳家氏

例えば「オールドスタイルの落語を現代の観客に理解してもらうために、演者として最も大切なことは？」「今の新作落語のファッション的な人気に古典落語の座が奪われるのでは？」といった質問が活発に寄せられ、ドキッとしたものである。

ハワイの日系養老院を慰問し、落語を聞いてもらったのも嬉しいことであった。50年前に日本で『時そば』を聞いたというお年寄りもいて、日本への思いにじんと来た。このように、皆様のご尽力によって1か月間、延べ3000人以上の方々に参加していただいた。私は、これまでの文化交流使の中で最高齢だそうである。老骨に鞭打ち、頑張ったと思う。

**榎木** 海外で落語というと、戸惑いがあったのでは？

**柳家** これまでも海外で活動していたため、違和感は全くなかった。

**榎木** 日本語の笑いのツボは、どのように伝えるのか。

**柳家** 「橋の端を歩くなよ」といった日本語のシャレもあるが、やはり世界に共通しているのはハート。ハートをいかに伝えるかを心掛けることで、笑いは共有できる。日本人同士でも、本当は心を伝えたいのに言葉を選べないという現実があると思う。

**榎木** 字幕スーパーに合わせて、ゆっくり喋ることもあるのか。

**柳家** 字幕スーパーではポイントしか表示せず、あとは想像していただく。それが結構、笑いにつながっていくものである。

## トークセッション

**榎木** まず、文化交流使という制度に対するお考えを聞かせていただきたい。

**宮田長官** 実は、昨日サンクトペテルブルクから帰国したところである。プーチン大統領と、教育や若者の育成の重要性、人のつながりの素晴らしさについて語り、固い握手を交わしてきた。やはり重要なのは人である。まさしくそれは、文化交流使の皆さんがこれまで培われてきたものだと思う。私自身、東京藝術大学に50年間いたことで、常に若者と接し、どれほど影響を受けたことか。この年でも、自分の中に学生気分がまだ残っている。

**榎木** 日本文化を海外へ出すということについては？

**宮田長官** 1990年頃、ハンブルク的美術工芸博物館へ1年間行かせていただいたが、その頃の人々とは未だに交流がある。文化交流使の皆さんと世界とのつながりも一生。特別な使命があるように思う。

**榎木** 文化交流使の皆さんには、やはり日本を背負っているという感覚があるのか。

**山田** どの国へ行っても必ず、日本の文化交流使という肩書で紹介されていた。日本を背負って来ているように見えたようである。

**佐野** 文化交流使という肩書だけでも特別な存在にならず、一緒にご飯を食べて現地の人に溶け込めるよう心掛けた。

**土佐** 普通の留学とは異なるので、文化交流使とは何をやるのか、その説明から入るパターンが多かった。

**藤間** 日本を背負うという意味では、日本舞踊をしている時点でもれなく日本代表といえる。日本の伝統をきちんと体現する人間でありたいと常に思っている。

**佐藤** 私の場合、日本のブランドを世界にうまく伝えたいという思いがある。とくに今回は、デザインやブランディングを文化として、どう伝えればいいのかと意識してやってきた。

**柳家** 文化交流使という肩書を背負うのは、結構きつと思う。でも、いい反応が返ってくると、文化というものは押し付けるものではなく、相手が理解してくれるものなのだと感じた。

**榎木** 文化交流使として海外で活動した後、心境などに変化はあったか。

**山田** たくさんあった。例えば、2時間以内にやらなければいけない場合、日本人は、きちんと組み立てていく。しかし全ての国で、それがよしとされているわけではない。そ



交流使に語りかける宮田長官

ここで自分のやり方を押し付けるのか、それとも互いのいい塩梅を見つけるのか。11か国で色々な共同作業をしていく中で、「クリエイティブな妥協」ができるようになったと思う。ただ諦めるのではなく、一步譲ることで次のステップにつなげられる。

**佐野** 確かに思っている通りには行かないため、ほぼアドリブで対応せざるを得ない。また、海外では寛容さを感じる。駄目だったら駄目で考えようという寛容さは、見習うべきだと思った。

**土佐** 解決策を見出すべき時は、相手が何を言いたいのかを理解すること、コミュニケーション力が大事だと思った。東南アジアでは、こちらから押し付けず、ひたすら待った。意外だったのは、最も敷居の高かったニューヨークで一番大きなことをできたことが自信につながった。1人が協力してくれると、連結して一気に人々が協力してくれ、大きなことができるという場の力、タイミングに恵まれたと思う。

**藤間** やはり私は、伝統芸能という一つの枠の中で生きてきた。今、それを強く感じている。海外での活動は、妥協の連続である。檜の舞台などあるはずがなく、芝生にカーペット敷きでも踊らせていただいた。次へ進むために許容できるラインが低くなり、逆に自分で守らなければいけない部分も固まったような気がする。それからもう一つ。今回の活動の途中で、「日本舞踊」は現地語に翻訳せず「NIHONBUYO」とすべきと気づいた。「歌舞伎」は「KABUKI」,「能」は「NOH」である。

**宮田長官** 私のやっていた「鍛金」も翻訳すると他の意味になってしまうので、そのまま「TANKIN」とした。日本舞踊もぜひそうすべき。

**佐藤** ブランディングの仕事をする中で、日本のブランドが世界でどのくらい通用しているのかを知りたかった。今回の活動を通して、自分が思っているよりも日本文化はリスペクトされていると確信した。まだまだ行ける、すごくパワフルなものがあるということが、予想から確信に変わっ

て帰ってこられたことが、自分にとっては大きい。

**柳家** 落語にはビジュアルの要素が少ないため、正直言って不安だった。しかし、自分の中に確実に絵があれば、言葉は通じなくても心で伝えることができると感じた。『芝浜』という落語を聞いた大学生が「海が見えました」と言ってくれたこともあった。その海は、芝浜の海ではなく、自分が育ってきた中で見た海のはずである。やはり、心の中のビジュアルを相手に伝えることが大事。言葉だけで終わらせるのが落語ではないと感じた。

**榎木** では、言い足りないことがあれば、どうぞ。

**土佐** 日本文化は過去のものではなく、現在進行形であり、しかも訪問した国に押し付けるのではなく、融合していく必要がある。文化は生き物のように次の世代へ伝わっていく。今回の旅の中で、自分は歴史の中の点であり、それを次の世代に渡していかなければならないと自覚した。世界に目を向けて、日本文化を成長あるいは進化させることに目を向けていくべきだという気がした。

**榎木** 私も役者として、よりグローバルな日本人の根底にある侍の心は、とても大事で素敵なものだと思っている。若い世代を中心に日本人としてのアイデンティティが欠落している時代、何をすればそういう自覚が生まれてくるのか。再び考える必要があると思う。

**宮田長官** 最も残念なのは、日本人が日本の美しさを知らないことである。日本は地果てる国で様々な文化が流れ込んでくる。その文化をがっちり掴んで発信するのが文化交流使の皆さんであり、ここに参加されている皆さん。

**榎木** 今日は、6名の方々の活動を伺い、つくづくそういうことを感じた。文化交流使は素晴らしい制度なので、今後も継続していただきたい。

**宮田長官** 改めて今日をスタートに、日本を背負って活動を続けていただきたい。



トークセッションの様子

## 活動報告



## 佐藤 可士和

クリエイティブディレクター

株式会社博報堂を経て2000年に独立、クリエイティブスタジオ「SAMURAI」を設立する。グローバル社会に新しい視点を提示する、日本を代表するクリエイター。主な仕事にユニクロ、セブンイレブンのブランディング、国立新美術館のシンボルマークデザインなど。今治タオルのクリエイティブディレクション、有田焼創業400年記念事業における作品制作など日本の優れたコンテンツを海外に発信することにも力を注いでいる。慶應義塾大学特別招聘教授、多摩美術大学客員教授、東京ADC理事。『佐藤可士和の超整理術』（日本経済新聞社）はじめ著書多数。

## Kashiwa Sato

Creative director

After leaving Hakuhold Incorporated in 2000, Sato independently established Creative studio, SAMURAI. He is a leading Japanese creator who proposes a new perspective on global society. His major projects include branding of UNIQLO and Seven Eleven and designing the logo for National Art Center, Tokyo. He has also devoted his energy to introducing the superior aspects of Japan to the outside world by acting as creative director for Imabari Towel, and creating works for the 400th anniversary of Arita Porcelain. He is a Guest Professor at Keio University, and a Visiting Professor at Tama Art University, and board member of Tokyo Art Directors Club, and has authored "KASHIWA SATO'S Ultimate Method of Reaching the Essentials" (Nikkei Inc.) and other works.



## 佐野 文彦

建築家、美術家

1981年奈良県生まれ。京都、中村外二工務店にて数寄屋大工として弟子入り。設計事務所などを経て、2011年、佐野文彦 studio PHENOMENON (現 Fumihiko Sano Studio) を設立。大工として、技術や素材、文化などと現場で触れ合った経験を現代の感覚と合わせ新しい日本の価値観を作ることを目指してデザインやインスタレーションを手掛けている。

## Fumihiko Sano

Architect, Artist

Born in Nara Prefecture in 1981. He entered Nakamura Sotoji Komuten (Engineering Firm) in Kyoto as an apprentice of the master carpenter of the sukiya style of buildings. After working for other design firms, he founded the Fumihiko Sano studio PHENOMENON (the current name: Fumihiko Sano Studio) in 2011. As its carpenter, he works on design and installation, aiming to create a new sense of value in Japan by integrating a contemporary feeling with his experience of interacting with techniques, materials, culture and others on building sites.

撮影：伊熊泰子



## 土佐 尚子

アーティスト、京都大学教授

専門はアート&テクノロジー。感情・意識・物語・民族性といった人間が歴史の中で行為や文法などの形で蓄えてきた芸術文化を、デジタル映像で表現し、心で感じる「カルチュラル・コンピューティング」を提唱し、作品制作、研究を行う。近年では、研究を進展させ、ハイスピードカメラを使い、機械の目で自然を生け捕る映像表現「Invisible Nature」に取り組んでいる。最近では2012年韓国の麗水万博で250×30mのLEDスクリーンに龍を泳がせる作品を発表。2017年4月に1か月間ニューヨークタイムズスクエアの60台のビルボードで作品を発表。海外では、ニューヨーク近代美術館、国内では国立国際美術館などに作品が収蔵されており、メトロポリタン美術館等での招待展示がある。

## Naoko Tosa

Artist, Professor at Kyoto University

Her specialty is Art and Technology. She creates digital images that express arts and culture which have accumulated in the form of grammar and actions throughout human history—sentiments, consciousness, stories, national spirit—and advocates "cultural computing" that moves the human heart, creates works, and conducts research. In recent years, she has advanced her research and now uses a high speed camera to tackle "Invisible Nature" which expresses images that capture nature alive with a mechanical eye. And most recently, she announced a work showing a dragon swimming on a 250×30m LED screen at International Exposition Yeosu Korea 2012. Then throughout the month of April 2017, she showed a work on 60 billboards in Times Square in New York. Her creations are in the collections of many galleries, including the Museum of Modern Art, New York and other overseas galleries, and in the National Museum of Art, Osaka and others in Japan. She has also been invited to exhibit her works at The Metropolitan Museum of Art.



撮影：篠山紀信

## 藤間 蘭黄

日本舞踊家

江戸時代から続く「代地」藤間家の後継者。5歳で祖母 藤間藤子（重要無形文化財保持者）、母 藤間蘭景より踊りの手ほどきを受ける。「代地」に代々伝わる古典作品の継承と日本舞踊普及に力を注ぎ、初心者から師範まで幅広い対象者への指導とともに公演活動も数多い。「五耀會」同人。長唄は故家元6世 杵屋正次郎、能楽は金春流故金春信高、茶道は裏千家即日庵に師事。囃子は故藤舎せいに師事し、藤舎清士の名前も持つ。創作作品への評価も高く2015年発表の『信長』の成果などにより、第66回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

## Rankoh Fujima

Nihonbuyo dancer

He is the successor to the Fujima Family, which has been located at "Daichi" since it was awarded during the Edo period. When he was five, he started learning Nihonbuyo dance from his grandmother, Fujiko Fujima (Important Intangible Cultural Heritage) and his mother Rankei Fujima. He has devoted himself to passing on the classical works handed down by the Daichi School for many generations and popularizing Japan traditional dance "Nihonbuyo," and has guided many students ranging from beginners to masters at the same time as he has given many public performances. He is a member of the Goyokai. He studied Nagauta music under the head of the school, the late Shojiro Kineya VI, Komparu school Noh under the late Nobutaka Komparu, and tea ceremony of the Urasenke school under Sokujitsuan. He also studied Hayashi (musical accompaniment) under the late Seiko Tosha, and his stage name is Kiyoshi Tosha. His creative works have been highly praised and the success of the work "Nobunaga" that he presented in 2015, earned him the Sixty-sixth Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology's Art Encouragement Prize.



## 柳家 さん喬

落語家

1967年に五代目柳家小さんに入門し、1981年に真打昇進。古典の人情噺や滑稽噺を得意とする実力派。日本全国で寄席や独演会の高座に出演し、後進の育成に励む傍ら、日本語学習者が落語を通して日本語表現や日本文化理解を深めるための活動を継続している。2006年以降毎年実施している米国ミドルベリー大学夏期日本語学校における落語公演・小噺指導のほか、韓国、シンガポール、チェコ、ハンガリー、フランス、ポーランドなどにおいて公演・指導を行っており、その活動は、各地の日本語教育関係者から高く評価されている。2014年国際交流基金賞受賞。2017年紫綬褒章受賞。

## Sankyo Yanagiya

Comic storyteller

He was apprenticed to Kosan Yanagiya V in 1967, and rose to the rank of Shin-uchi in 1981. He is a talented performer who specializes in classical human-interest and comic stories. He has performed throughout Japan in music halls and given solo performances on the stage, worked to train successors, and at the same time, has continued activities to deepen understanding of how to express oneself in Japanese and of appreciation of Japanese culture through Rakugo among students of the Japanese language. Since 2006, he has performed Rakugo and taught the art of telling anecdotes at the annually held summer Japanese language school at Middlebury College in the United States. He has also performed and given instruction in Korea, Singapore, Czech Republic, Hungary, France, Poland, and elsewhere, earning the admiration of Japanese language educators around the world. In 2014, he was awarded the Japan Foundation Award and in 2017, he earned the Medal with Purple Ribbon.



撮影：宮川舞子

## 山田 うん

振付家, ダンサー

器械体操、バレエ、舞踏などを経験し、ダンサー・振付家として活動を始める。17人のダンサーが所属する日本における希少なコンテンポラリーダンスのカンパニーとして、日本、アジア、中東、欧州、アメリカ等で舞台公演を行う。音楽、美術、文学、学術、ファッション、伝統芸能など異分野との共同制作や、演劇やオペラの劇中所作指導や新体操選手への振付も行う。また老若男女問わず誰にでも開かれたワークショップを行ったり、世界各国の国立バレエ団、大学、ダンス教育機関に招かれ、マスタークラスや作品提供を通して世界の第一線で活躍するプロダンサーの育成にも貢献している。第8回日本ダンスフォーラム大賞、第65回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

## Un Yamada

Choreographer, Dancer

After her experience of gymnastics, ballet, and butoh, she started her career as a choreographer and dancer. She founded a big contemporary dance company, which currently has 17 Japanese dancers. Their work is sensitive, energetic and dynamic, attracting worldwide attention. Now Co.Un Yamada performs at many cities in Japan, Asia, Europe, Middle East, USA, and has done collaboration works with the fields of music, fine art, literature, academic, fashion and traditional local performing arts. Also her choreography & staging for opera, drama and rhythmic gymnastics are highly acclaimed. She has open workshop for non-professional people and also contributed to the development of professional dancers who are active at the front-line around the world, by accepting invitations to perform with national ballet companies, universities, and dance training schools in many countries, and by holding master classes and providing new works for these organizations. She received the 8th Japan Dance Forum Award, and the 65th New Face Award of Minister of Education Awards for Fine Arts.



## 佐藤 可士和

クリエイティブディレクター

活動期間 平成 29 年 3 月 18 日～4 月 17 日

活動国 アメリカ、イギリス、フランス

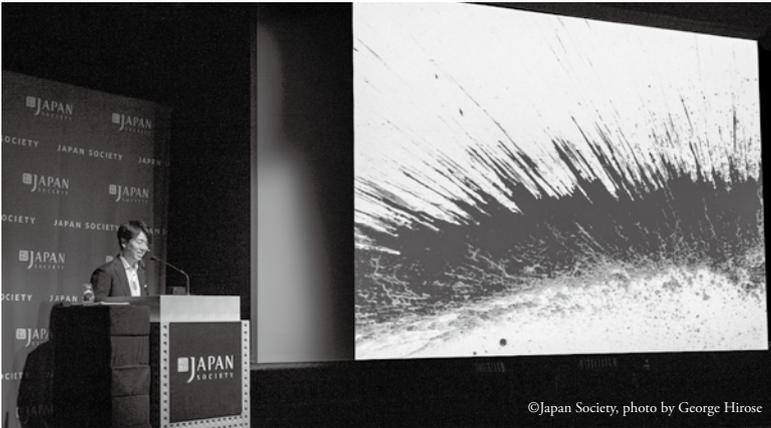
## Kashiwa Sato

Creative director

Period of the activities: From March 18 to April 17, 2017

Countries visited: The United States, the United Kingdom and France

# ICONIC BRANDING



NYの目米交流団体 JAPAN SOCIETY での「ICONIC BRANDING」の講演  
Lecture "ICONIC BRANDING" at the Japan Society, Japan-American exchange group, in New York

今回、クリエイティブディレクターという職種としては初めて文化交流使に選んでいただきましたが、これはクリエイティブディレクションという仕事が、日本文化の一端を担っていると正式に認めていただけたということでもあり、と思っています。仕事で海外に行くことは多いですが、クリエイティブディレクションやデザインを、日本の文化としてプレゼンテーションしたことはなかったので、とてもよい機会をいただきました。

ニューヨーク、ロンドン、パリで行った講演では、近年手掛けてきた有田焼や歌舞伎の八代目中村芝翫襲名披露公演など、日本の伝統文化と深く関わる仕事を中心に、「ICONIC BRANDING」という私のこれまでの仕事に一貫するデザインフィロソフィーについてお話ししました。世界中の情報があふれ、グローバル化、多言語化も加速する現代の社会において、「言語外言語」であるデザインを用いたコミュニケーションは、イメージ形成の上で非常に重要な手段です。中でも強い「アイコン」を作り効果的に発信していくことによる理解の深化とスピードは、言語や習慣の壁を超えてコミュニケーションができる突破力を持っています。講演の中では、「アイコン」としてまず思い浮かぶ

<ロゴマーク>のみならず、MADE IN JAPANの安心・安全・高品質の象徴となった「今治タオル」の純白のタオルのようなくプロダクト>、近未来的なインテリアや什器で話題を集めたユニクロのTシャツストア「UT STORE HARAJUKU.」などの<空間>、園舎自体を巨大な遊具と捉えた「ふじようちえん」などの<建築>、また街をキャンペーンビジュアルでジャックしたユニクロの世界展開などのようなく街の風景>、さらには、伝統と革新の融合を実現させるべく、有田焼の職人が絵付けなどに用いるダミ筆という伝統的な道具をあえて使い、スプラッシュペインティングという

型破りな手法に挑戦した『DISSIMILAR - 対比 -』シリーズに見られる<方法論>という、6つのタイプの「アイコン」を事例とともにご紹介しました。パリでは、日本文化会館並びに The Japan Store ISETAN MITSUKOSHI Parisにおいて、その『DISSIMILAR』シリーズの磁器と新作ドローイングの展示も行い、私が作品や制作背景について解説するギャラリーツアーも行いました。

このようなかたちで海外の方々とお話し、直に反応を聞いて、膨大な情報を得る中で多くの発見もありました。一連の仕事に対して、日本ならではの「間」やミニマリズムを感じるという反応を多くいただき、日本文化、特に伝統をいかに革新していくかということへの関心の高さを感じました。また、文化を伝える上では、単体のコンテンツだけを持っていくのではなく、しっかりとその背景のストーリーをつくってプレゼンテーションすることが非常に重要であることを改めて認識しました。今回得た経験を活かし、日本の優れた企業やブランド、コンテンツ、伝統的工芸や地場産業などを、デザインの力を活用して広く世界に発信していくことに、より力を注いで参りたいと思っています。

# ICONIC BRANDING



Q&A も非常に盛り上がった The Japan Store のギャラリーツアー  
A gallery tour of The Japan Store where a lively Q&A session was held

I am the first creative director to be selected as a cultural envoy of Japan, which I believe, signifies that the work, creative direction, is now formally recognized as one with a role in Japanese culture. My work has often taken me abroad, but I have never presented about creative direction or design as aspects of Japanese culture, so this will be a great opportunity.

At lectures I have given in New York, London, and Paris, I explained my design philosophy, “ICONIC BRANDING,” which penetrates all of my past work, and which has centered on work closely related to the traditional culture of Japan, such as Arita Porcelain, or a performance given to announce his succession to his new name by the Kabuki performer, Nakamura Shikan the 8th, which I have undertaken in recent years. In modern society, where information is growing worldwide and globalization and multilingualization are accelerating, communication applying design which is a “BEYOND LANGUAGE” or, “NON-VERBAL COMMUNICATION” is an extremely important method of forming images. At the same time, the greater depth and speed of understanding obtainable by creating and effectively popularizing powerful icons has the break-through power to communicate through barriers of language and customs. In my lectures, I have introduced not only “LOGO,” which are the type of “ICON” that first comes to mind, but also examples of six kinds other types of icons. These include “PRODUCT,” such as the pure white towels from Imabari Towels which symbolize the safety, security, and high quality signified by “Made in Japan,” “SPACE” such as “UT STORE HARAJUKU.,” a T-shirt store operated by UNIQLO that has become a hot topic for its futuristic interiors and utensils, “ARCHITECTURE”

typified by Fuji Kindergarten that treats a doughnut-shaped classroom building as a gigantic playground, “CITY” such as the world exhibition by UNIQLO, which took over a street to present a campaign visual, and “METHOD” represented by the “DISSIMILAR” series blending tradition and radical innovation as Arita Porcelain’s craftsmen use the traditional big, fat brush called a “damifude” in order to paint, to take up the challenge of the daring new method called “splash painting.”

In Paris, Maison de la Culture du Japon and The Japan Store ISETAN MITSUKOSHI Paris held an exhibition of the “DISSIMILAR” series of porcelain products and new drawings and I conducted a gallery tour to explain these works and the background to their creation.

I made many discoveries through the process of talking to people overseas directly, hearing their views, and obtaining a great deal of information through these activities. Many have responded to this series of works by declaring they gained a sense of “ma” and minimalism unique to Japan, and I felt their great interest in the way that Japanese culture, and particularly its traditions are revolutionized. I have also been reminded of the fact that in order to communicate culture, it is extremely important to not only present that culture, but to work hard to present it accompanied by the story of how it comes into existence. I am eager to take advantage of my these experiences and use my skills as a designer to devote myself to telling the whole world about Japan’s superior corporations and brands, contents, traditional arts, regional industries and so on.



The Japan Store ISETAN MITSUKOSHI Paris では有田焼作品「DISSIMILAR」を展示  
At The Japan Store ISETAN MITSUKOSHI Paris, the Arita Ware work “DISSIMILAR” was exhibited



撮影：伊熊泰子

## 佐野 文彦

建築家、美術家

活動期間 平成 28 年 8 月 20 日～平成 29 年 5 月 10 日

活動国 イタリア、デンマーク、ベルギー、フランス、オランダ、アイスランド、ドイツ、韓国、マレーシア、フィリピン、中国、インド、エチオピア、メキシコ、アメリカ、インドネシア

## Fumihiko Sano

Architect, Artist

Period of the activities: From August 20, 2016 to May 10, 2017

Countries visited: Italy, Denmark, Belgium, France, the Netherlands, Iceland, Germany, Korea, Malaysia, the Philippines, China, India, Ethiopia, Mexico, the United States and Indonesia

## 文化交流使の活動を終えて

文化交流使として、16 개국, 32 都市以上を旅してきました。

元々、数寄屋と言われる茶室や料亭を作る大工だった私は、日本が文化や伝統を失ってきていることを日々感じていました。文化交流使として海外へ派遣されることになったことから、様々な国や地域に残る技術、素材、環境などの文化を、グローバル化や経済優先の政策、無秩序な機械化や開発などによって失われてしまう前に見ておきたい。また、それらの文化に私がかかわることで何かができるのではないかと思います。現地の材料を使い、現地の人々と、現地の文化を取り入れた空間を作り、茶会を開催するというプロジェクトを立ち上げました。

最初はブリュッセルにて、「In praise of waves」という展覧会にインスタレーション作品で参加しました。

ブリュッセルというベルギーでは大きい都市で、ローカルな素材とは何かを考えました。その際、各地で建物を工事している風景を目にし、廃材を使うことを考えました。ヨーロッパでは築 200 年、300 年というアパートなどは珍しくありません。

廃材を集め、小さな空間を作り、オープニングパーティーで茶会をしてもらいました。マレーシアのランカウイ島では、現地で「カンボンハウス」と呼ばれる小屋を移設、現

地の大工とともに改造し、外部にハーフミラーフィルムを貼ったアクリルパネルによって空間に境界を作りました。またそこでも現地の人にもてなしのティーパーティーをしてもらいました。

フィリピンのネグロス島では、ヤシの木とヤシの葉を使った現地式の高床になった茶室を建てました。パーティではかかわってくれた人々やその家族、市長や副市長も参加し、豚の丸焼きなどを作ってもてなしの形を見せてもらいました。

アムステルダムでは、デザインホテルとして有名なロイドホテルの一室を、100～300 年ほど前に使われていた古材を集め、和室を作りました。「MONOJAPAN」という日本のプロダクトの展示会の開催に完成日を合わせ、駐オランダ日本大使やゴッホミュージアムのキュレーターなどのゲストも参加し、茶会を開きました。

オープニングパーティーや展示会期間中は数百人の人々が茶会に参加したり、部屋を訪れたりしました。

エチオピアでは、メケレ大学の学生へのレクチャーと、ワークショップとして、彼らのもてなしの形であるコーヒーセレモニーを行うための部屋、コーヒーセレモニールームを、学生たちと設計、施工しました。

韓国では済州島に、チャンチンの木を使って、茶室を建てました。木材を探すところからスタートし、原木を加工、韓国の伝統的なディテールを用い、済州島によく見られる茅葺の家のプロポーションを持った小屋を建設しました。

これはまだ完成はしていませんが、オープニングのレセプションを行う予定です。

その他の国でも、形にはなりませんが様々なプロジェクト、打合せや出会い、食事や遺跡、文化財、アート、デザイン、自然など、多くのものを見て、経験を得ることができました。この経験は私の人生においてとても大切なものとなるでしょう。



Negrosにて竣工した建築物  
Building completed in Negros

## After the activities of the cultural envoys

I have traveled to 16 countries and more than 32 cities as a cultural envoy.

I've been working as a carpenter called *sukiya* who built tea ceremony huts and Japanese style restaurants called *ryotei*, and I gradually came to believe that Japan had lost its culture and traditions. Because it has been decided that I will travel overseas as a cultural envoy, I'd like to imprint technologies, materials and environments, the cultures left in other countries and regions before they are lost because of globalization, policies prioritizing economics, unregulated mechanization and development. I hope I might be able to contribute something to these cultures in some way; therefore, I decided to launch a project to hold a tea ceremony by making spaces based on local culture and its materials with locals.

First of all, I performed an installation work at "In Praise of Waves" exhibition held in Brussels.

I wondered what local materials I could find in Brussels, a large city in Belgium. I started thinking about using scrap woods for own creations when I saw a lot of buildings under construction in around areas. In Europe, apartments built 200 or 300 years ago are not a rare sight.

I gathered scrap woods and built a small space. A tea party was opened at the place at the Opening ceremony. On Langkawi Island, which is part of Malaysia, I relocated a small house called "Kampung House" and reconstructed it with local carpenters, then formed the boundaries to this space with acrylic panels covered with a half mirror film. They have a tea party and I experienced their warm hospitality once again.



Langkawiにて展示作品内でのセレモニー  
Ceremony held among exhibited works in Langkawi



Amsterdamにて設計、施工した客室  
Guest room designed and constructed in Amsterdam

On Negros Island in the Philippines, I used palm tree woods and leaves to build a high-floored tea hut. Those who are involved in its construction, their families, mayor and deputy mayor attended the welcoming party and they served a roasted pig as a traditional dish to me.

In Amsterdam, I built a Japanese style room with old-growth timber in a room in the Lloyd Hotel, which is famous for its design. I completed it to coincide with the first day of "MONOJAPAN," an exhibition for Japanese products and hold a tea ceremony. Ambassador of Japan to the Netherlands and a curator from the Van Gogh Museum among the guests attended the ceremony.

At the opening party and during the exhibition period, a lot of people visited the room and enjoyed the tea ceremony.

In Ethiopia, as lectures and workshops to students in Mekelle University, the students and I designed and built a "coffee ceremony room," a room to be used for coffee ceremonies, which is a way they show the hospitality.

On Jeju Island in Korea, I used Chinese mahogany to build a tea ceremony hut. I started by searching for the wood first. Then I processed it, applied traditional Korean detailing and built a hut with the proportions of thatched roof houses which are often seen on Jeju Island. It has not completed yet, but I will hold an opening reception in the future.

In other countries, I experienced and learned a lot from my activities as a cultural envoy such as various projects, meetings, interactions with people, foods, ruins, cultural properties, art, design, nature and many other things. I hope these experiences will play an extremely important role in my life.



## 土佐 尚子

アーティスト、京都大学教授

活動期間 平成 28 年 10 月 27 日～平成 29 年 4 月 30 日

活動国 イギリス、韓国、フランス、アメリカ、シンガポール、タイ、フィリピン、ニュージーランド

## Naoko Tosa

Artist, Professor at Kyoto University

Period of the activities: From October 27, 2016 to April 30, 2017

Countries visited: The United Kingdom, Korea, France, the United States, Singapore, Thailand, the Philippines and New Zealand

## Looking for Japan

地球を2周ほどした私の文化交流使の旅は、世界中の人々が日本の美をどのように受け取っているのかを学ぶ旅でした。実は、文化庁の方が京大総長を訪問された時、「本当は行ってほしくないのだけれども」と言われるぐらい、周りの目は厳しいものでした。それでも、文化交流使として自分の作品を通して日本文化を伝え、文化交流を通して得たものは、その後の人生観を大きく変えました。私の文化交流使の旅は、期待と不安を抱えたままロンドンから始まりました。私の作品は、日本文化の美意識と先端技術を合わせた作品が特徴です。ロンドンの旧市庁舎であるカウンティホールで、2016年に京都の建仁寺に奉納した作品群を持っていき『Looking for Japan』という個展を開催しました。その後、Goldsmithsでの特別講義を行い、その後Goldsmithsと京大との学術交流協定に発展し、翌年京大Goldsmiths国際シンポジウムを開き学術交流協定を結びました。11月には、パリ日本文化会館で講演も実施しました。1月のシンガポールでは、Japan Creative Centerでの講演とIkkan Art Galleryでの新作の個展を開催しました。1月後半には、米国ロスアンゼルスUCLAの芸術学部

に招かれ、パネルディスカッションと展覧会を実施、ロスアンゼルス総領事館で講演を行いました。2月には国際交流基金の招きでフィリピンのマニラに訪問し、現地の美術大学での講演とユチェンコ美術館での展覧会を実施しました。2月の後半には、ニュージーランドへ向かい、オークランドギャラリーで講演を実施し、ウェリントンではマッセー大学で講演と展覧会を実施しました。3月上旬には、ニューヨークへ向かい、メディアアートのアートフェア「Moving Image」に作品を出品

しました。その後、ロンドンへ向かい、Goldsmithsと2017年度の京大国際シンポジウムの企画ミーティングを行いました。最後は4月に、1か月間NYに滞在しました。NYジャパン・ソサエティのギャラリーとのコラボレーションで土佐映像作品の『Sound of Ikebana (Spring)』を、Times Square Artが主催する「Times Square Midnight Moment」に応募し、その映像は寒いNYの春の桜を待つ人々の心を捉え、2017年4月のアーティストとして選ばれました。4月の1か月間、NYの象徴であるTimes Squareのエレクトリックビルボード60台に毎夜11時57分から3分間上映され、NYの人々に映像の夜桜を振る舞いました。4月の半ばには、NY日本総領事館で講演を行いました。4月後半には、NYジャパン・ソサエティの日本イベントでの映像インスタレーションを実施しました。また私のビデオアートをMoMAでコレクションした元MoMAのシニアキュレーターで現イェール大教授のバーバラ・ロンドン氏や日本研究で著名なドナルド・キーン研究の第一人者であるコロンビア大学のポール・アンドラー教授とも交流しました。



NY Times Square Midnight Moment での土佐映像作品『Sound of Ikebana (Spring)』を60台以上のビルボードで4月毎夜3分間、上映されました。

April: View of my video work, "Sound of Ikebana (Spring)," being shown for 3 minutes every night on more than 60 billboards as part of NY Times Square Midnight Moment

# Looking for Japan



シンガポールの Ikkan Art Gallery での土佐映像作品『Genesis』をシンガポールの篠田大使に説明する様子

View of me explaining the Tosa Video Work "Genesis" to the Singapore Ambassador Shinoda in the Ikkan Art Gallery in Singapore

My travels as a cultural envoy of Japan, which have taken me to around the world twice, was the journey that taught me how people around the world see the beauty of Japan. In fact, when representatives of the Agency for Cultural Affairs, Japan visited the President of Kyoto University, the President said "We really do not want you to go, but..." since the gaze of the people surrounding me was so harsh. But the benefits I gained by conveying Japanese culture and exchanging culture through my works have extremely changed the view of my life. My journey as a cultural envoy began from London with hopes and fears. My works are characterized by a blend of the beauty of Japanese culture and the latest technologies. "Looking for Japan," a solo exhibition was held at the County Hall, a former headquarters of the London County Council. I brought a group of works which were dedicated to Kenninji Temple in Kyoto in 2016 for the exhibition. After that, I gave a special lecture at Goldsmiths, which later advanced to become an academic cooperation and exchange agreement between Goldsmiths and the University of Kyoto. The following year the University of Kyoto – Goldsmiths International Symposium was held and the academic cooperation and exchange agreement was signed. In November, I also gave a lecture at the Japan Culture Hall in Paris. In January, I lectured at the Japan Creative Center and held a solo exhibition of my new works at the Ikkan Art Gallery in Singapore. In late January, I was invited to the school of the arts at UCLA in Los Angeles, US. I conducted a panel discussion and an exhibition, then delivered a lecture at the Consulate-General of Japan. In February, I visited Manila

in the Philippines with the invitation from Japan Foundation and gave a lecture at a local art college and held an exhibition at the Yuchengco Museum. In late February in New Zealand, I lectured at the Auckland Art Gallery first, then moved to Wellington and lectured and held an exhibition at Massey University. In early March, I traveled to New York to exhibit my works at the media art fair, Moving Image. After that I went to London and had a meeting with Goldsmiths for plans of Kyoto University International Symposium in 2017. Finally, in April, I went back to New York and stayed for a month. I performed a video production "Sound of Ikebana (Spring)," in collaboration with the New York Japan Society's gallery, at the "Times Square Midnight Moment" held by Times Square Art. This video presentation grabbed the hearts of people who are eagerly waiting for blooming spring cherry blossoms in frigid New York, and I was selected as the artist for April 2017. For one month in April, my video work was broadcasted for 3 minutes from 11:57 p.m. on sixty symbolized electronic billboards in Times Square every night. People in New York enjoyed watching images of night cherry blossoms. In the middle of April, I gave a lecture at the Consulate General of Japan in New York. Also, in late April I performed a video installation at a Japan Event held by the New York Japan Society. I met Barbara London, a professor at Yale University and former senior curator of the Museum of Modern Art (MoMA) who exhibited my video art at MoMA, and Professor Paul Anderer of Columbia University, a leading expert on Donald Keene who is famous for his research on Japan.



私が20代の頃作ったビデオアート『An Expression』をニューヨーク近代美術館(MoMA)のコレクションにした元 MoMA のシニアキュレーターのバーバラ・ロンドンとの20年ぶりの再会。NYにて

I met Barbara London, a former senior curator of the Museum of Modern Art (MoMA) who exhibited a video art "An Expression," which I created in the 20s, at MoMA for the first time after 20 years in NY



撮影：篠山紀信

## 藤間 蘭黄

日本舞踊家

活動期間 平成 29 年 3 月 29 日～7 月 25 日

活動国 アメリカ、チェコ、ウクライナ、ポーランド、ハンガリー、スロベニア、フランス、ロシア、ドイツ、イタリア

## Rankoh Fujima

Nihonbuyo dancer

Period of the activities: From March 29 to July 25, 2017

Countries visited: The United States, Czech Republic, Ukraine, Poland, Hungary, Slovenia, France, Russia, Germany and Italy

# 10ヶ国14都市での日本舞踊紹介 感じた意義と責任



『都鳥』上演（プトゥイ・ドミニコ修道会教会ホール 2017/6/19）  
Performance of "Miyako-dori" (June 19, 2017, Dominican Order Church Hall in Ptuj)

「日本舞踊を世界に発信する」ために、衣裳・髪かつらをつけた『山帰り』、素踊り（扮装なし）の『都鳥』の2演目を選定、これを柱に講演の資料やワークショップ用の30本の扇子などを用意し、3月29日に出発しました。

最初のハワイでは現地在住の門弟が公演をアレンジ。2演目に加えピアノ演奏で『荒城の月』を披露。すでに日本語を話されない日系の方が、邦楽の拍子とともに身体を揺らし、「春高樓の…」と口ずさみながら涙を流されていました。活動の対象に当初「日系人」は考えていませんでしたが、そこにも大きな意義を感じました。それは次の活動地シヤトルでも同様でした。

ワークショップは子供達からプロダンサーまで様々な方を対象に、プラハやパリなどで行いました。日本舞踊では男性も女性を、女性も男性を演じるため、男女役の基本的な身体の使い方などを説明。どこの会場でも楽しそうに異性を演じていました。ただ、受講者には「伝統芸能体験」ではなく「安直な模倣」が目的の方もおられ、ワークショッ

プの難しさも感じました。

NY大学などでは「日本舞踊とは」という講演も行いました。歴史から紐解いての内容は、学生だけでなく日本語教師にとっても興味深かったようです。

ブダペスト他の劇場公演でも必ず解説を付けました。男性の私が作品の中で女性にもなり、扇子が風にも波にも、あるいは徳利にも煙管にもなる「見立て」を実演付きで説明してから作品を見て頂くと、やはり観客の集中度は増します。

キエフでは寺田宜弘さんと彼が芸術監督を務めるキエフ国立バレエ学校の生徒達、ピアニストの木曾真奈美さんと共に日本舞踊&バレエの『展覧会の絵』（ムソルグスキー作曲）の創作活動を連日行い、5月27日に曲のモチーフとなった史跡「黄金の門」で念願の世界初演を果たしました。また、サンクトペテルブルグでは、ファルフルジマトフさん、岩田守弘さんと『信長』のリハーサルを行い、8月5・6日、東京で無事に上演することができました。

「舞台を通して日本の美意識に触れることができました」—ナポリ公演後に聞いた感想です。嬉しさと同時に日本舞踊家としての「責任」も強く感じました。この4ヶ月の貴重な経験を活かし、今後も活動していきたいと存じます。



『都鳥』解説付き公演（クラクフ・日本美術技術博物館ホール 2017/6/1）  
Performance of "Miyako-dori" with commentary (June 1, 2017, Manggha Museum of Japanese Art and Technology in Kraków)

# Introducing Nihonbuyo Dance in 14 cities in 10 countries

## My impression of its significance and my responsibility



『都鳥』解説風景（プラハ・ナ・ブロードレ劇場 2017/5/11）  
View of a commentary on “*Miyako-dori*” (May 11, 2017, Divadlo Na Prádle in Prague)

In order to bring Nihonbuyo dance to the world, I selected two numbers, “*Yamagaeri*” that is performed wigged and costumed, and “*Miyakodori*” that is danced without costume. With these as the heart of my presentation, I prepared performance documents and folding fans for workshops and set out on March 29.

In Hawaii, which was my first stop, one of my pupils who now lives there arranged my performance. In addition to my two dance numbers, I played “*Kojo no Tsuki* (Moon over a Ruined Castle)” on the piano. Japanese Americans who were already unable to speak Japanese wept as they swayed to the rhythm of the Japanese music, and hummed, “Haru Koro no...” I had not initially thought that my activities would be presented to Japanese Americans, but I felt that this was also very significant. The same thing happened in Seattle where I continued my activity.

I gave workshops for various participants ranging from children to professional dancers in Prague, Paris, and other cities. In the Nihonbuyo dance world, men perform women’s dances and women perform men’s dances, so I explained the basic way to use one’s body for male and female parts. Everywhere I went, they appeared to enjoy dancing the role of the opposite sex. But some of the participants were there for cheap imitation instead of to experience traditional arts, so I also felt the difficulty of the workshops.

At New York University, I gave a lecture “What is Nihonbuyo Dance.” Exploring its historical development

appeared to be of great interest not only to university students, but also to the Japanese teachers.

At performances in theaters in Budapest and elsewhere, I always included a commentary. Before performing, I explained how I, a man, also performed as a woman and demonstrated how I could use a folding fan to represent the wind and waves, or even a sake bottle or a traditional Japanese pipe. Explaining a performance beforehand, increases the audience’s attention to the performance that will follow.

In Kiev, for several successive days, I took part in the creation of a performance of “*Pictures of an Exhibition*” (composed by Mussorgsky) a piece combining Nihonbuyo dance and ballet performed by students of the Kiev State Ballet School that employs Nobuhiro Terada as Artistic Director accompanied by pianist Manami Kiso. On May 27, I presented the longed-for world’s premier at the Great Gate of Kiev, a historic site that is a motif of Mussorgsky’s composition. Then in Saint Petersburg, I rehearsed “*Nobunaga*” with Farukh Ruzimatov and Morihiko Iwata, and we successfully performed it in Tokyo on August 5 and 6.

Some who saw it performed in Naples expressed their feeling that they had succeeded in touching the Japanese aesthetic sense through the stage. Along with delight, I keenly felt my responsibility as a performer of Nihonbuyo dance. I hope to make full use of these four months of priceless experiences in my future activities.



ワークショップの様（プラハ音楽アカデミー 2017/5/9）  
View of a workshop (May 9, 2017, Music Academy Prague)



## 柳家 さん喬

落語家

活動期間 平成 29 年 2 月 5 日～3 月 6 日

活動国 アメリカ、カナダ

## Sankyo Yanagiya

Comic storyteller

Period of the activities: From February 5 to March 6, 2017

Countries visited: The United States and Canada

## 落語を通しての日本語学習と文化



ミシガン大学での落語会の様子

View of a Rakugo performance at the University of Michigan

今回、カナダ・アメリカを中心に、トロント大学、ボストン大学、ハーバード大学、ミシガン大学、パデュー大学、UCLA、ハワイ大学、ボストンラテンアカデミー、日本語補習学校などを中心に、日本語学習をなさっている学生さん及び一般の方々に、落語を通して日本語と日本文化への興味と理解を深めていただくことを目的に活動させていただきました。それに加え各地の総領事館と国際交流基金の協力を頂き、一般の方々も多く参加して下さりパワフルな公演ができたような気がいたします。文化交流使としての活動公演は、最小限の字幕を使い、少しでも落語を通して日本語学習や日本の古典的文化を楽しく観ていただくことに重点を置きました。

多くの字幕を使うと、字を追うことに集中してしまい、演技や言葉が伝わらなくなってしまいます。

落語を楽しむ言葉をより身近に感じていただくには、最小にとどめた方が効果的だと思います。

其々の公演先には日本語を理解できない方も多く参加して下さりましたが、その多くの方々が、日本で演じる際

と同じところで笑っていただけたことに喜びを感じました。

また、日本の古典芸能が、人間の心の奥を表現しそれを観客に委ねて感じて貰うことが多いと思います。

落語もその部分を重要な表現として演じます。今回大きく感じたのは、その心が観客に伝わり深く理解していただけたことだと思います。おそらくこれは全ての文化交流使の方々が折に触れ感じたことだと思います。

ワークショップとしての活動としては、大学生、高校生に、それぞれが日本語で覚えた小噺を稽古して差し上げました。

皆さんは真剣に稽古に参加してくださいました。

何度も繰り返し稽古をしているうちに自分で演技を考えるようになり、一度目の稽古とは違う演技になり、日本語を操ることを楽しく感じてくれるようになりました。

皆さんには各公演先で、一番手として観客の前で小噺を披露してもらいました。

緊張の色は隠せず上がった高座で、観客が笑い拍手をしてくれると、嬉しそうな顔をして戻って来て、他の出演者とお互いに親指立てて喜びあっている姿は、こちらも感動して嬉し涙がこぼれそうになりました。

日本語を上手く使えない、日系二世、三世の方々も多く参加して下さり、控室に来て下さり、「素晴らしい公演を有難うございます、日本人としての誇りを持ちました」と言われた時、「来てよかった!」と心底より喜びがこみあげました。

お世話を頂いた皆さんに心より感謝申し上げます。

# Learning Japanese and Culture through Rakugo



パデュー大学での稽古風景  
Teaching at Perdue University

I have been actively working to deepen interest in and understanding of the Japanese language and Japanese culture through Rakugo among students who are learning Japanese and other people, mainly in Canada and the United States, at the University of Toronto, Boston University, Harvard University, University of Michigan, Perdue University, UCLA, University of Hawaii, the Boston Latin Academy, and Japanese language schools. I also feel that, with the help of consulates in various regions and the Japan Foundation, I have succeeded in presenting powerful performances to the many people who attended. In the performances I have given as a cultural envoy, I prioritized entertainingly presenting Japanese lessons and Japan's traditional culture to some small degree through Rakugo while minimizing the use of sub-titles. If I used detailed sub-titles, the viewers would concentrate on following them so they would fail to appreciate the art and the language. I believe that minimizing them is an effective way to ensure that my audience feels closer to the pleasure and language of Rakugo.

Many people who were unable to understand Japanese attended my performances, but I was delighted that many of them laughed at the same places as people watching me in Japan. Japanese traditional arts express deep regions of the human mind and often entrust the audience members to respond emotionally in

their own way.

Rakugo is also performed as an important expression of this aspect of life. I am convinced that I was able to communicate and deepen the audience members' understanding of this spirit. I suppose that all the cultural envoys also feel this from time to time.

Through my workshop activities, I helped university students and high schoolers to practice anecdotes that each one learned in Japanese.

They all diligently participated in these practice sessions.

As they practiced their lines over and over, they personally considered their performance, their presentations improved from their first practice, and they began to delight in the experience of skillfully speaking Japanese.

I had them all present a short story to the audience as the lead in all of the public performances. On the stage, which they had ascended with signs of their tension unhidden, they earned the laughter and applause of the audience, then when I saw them return with expressions of joy on their faces and exchange the thumbs up signal of success, I too was moved to irrepressible tears of joy.

Many second and third-generation Japanese descendants who cannot speak Japanese fluently, also attended. When they came into the anteroom and exclaimed "Thank you for your great performance. I felt pride as a Japanese.," I thought "I am so glad I came!" as joy welled up from the bottom of my heart. I am deeply grateful to everyone who made my visit such a success.



トロントの国際交流基金でのトロント大学生へのワークショップ  
A workshop for students of the University of Toronto at the Japan Foundation, Toronto



撮影：宮川舞子

## 山田 うん

振付家, ダンサー

活動期間 平成 29 年 3 月 29 日～9 月 30 日

活動国 イスラエル, ジョージア, エストニア, アルジェリア, イギリス, ベルギー, スペイン, スリランカ, マレーシア, オーストラリア, アメリカ

## Un Yamada

Choreographer, Dancer

Period of the activities: From March 29 to September 30, 2017

Countries visited: Israel, Georgia, Estonia, Algeria, the United Kingdom, Belgium, Spain, Sri Lanka, Malaysia, Australia and the United States

# 中東, アフリカ, コーカサス, 欧州, アジア, オーストラリア, アメリカ

イスラエルではプロダンサーの教育機関「マスルール」の学生 16 人と共同制作&新作発表, 新入生審査, ソロパフォーマンス, イスラエル大使館での「日本とイスラエル, 身体文化の違いについて」と題してレクチャーを実施。アルジェリアでは舞台芸術, 映像技術, 批評を学ぶ大学で一週間のダンスクラス。ジョージアは国立バレエ団, 国立劇団, 国立バレエ学校でのクラスや公開ワークショップ, TV 出演など。エストニアではカンパニー 13 人とスタッフ 3 人と合流シタルトウの国立博物館, タリンのパバラバで公演。日本のコンテンポラリーダンスは珍しくチケットが即完売となり追加公演も実施。同時開催で和食教室や日本人写真展も開催。エジンバラで「インターナショナルチルドレンフェスティバル」を視察。ロンドンではアクラムカーン, ウィンマクレガー等, 第一線のカンパニーのクリエイション現場を訪問。ベルギーでは「フィールドワークス」にて, オランダ在住の楠田健造と新作デュオを制作。また, オランダ在住ピアニストの向井山朋子を含んだ 3 人でのパフォーマンスを在ベルギー日本国大使館で開催。スペインではマ



ベルギー 楠田健造との共同制作・新作デュオ『生えてくる』リハーサル風景  
Scenes of rehearsals for the new joint duo work with Kenzo Kusuda in Belgium



アルジェリア・ISMAS (芸術 & オーディオビジュアル貿易高等研究所) でのダンス授業後  
After a dance class in the Algerian ISMAS (Institut Supérieur des Métiers des Arts du Spectacle et de l'audio-visuel (High Institute of Performance and Audiovisual Arts))

ドリッドでのワークショップ他, カンパニーメンバー川合ロンとのデュオ作品『結婚』が 2 都市のフェスティバルに招聘されました。40 度を越す灼熱の野外公演でした。スリランカでは国立芸術大学での共同制作と合同公演, スリランカ軍, 伝統舞踊学校でのワークショップ, ベラヘラ祭視察など「伝統舞踊」との交流。マレーシアでは次作の準備を。オーストラリアでは先住民芸術リサーチとダンスの現状を視察。ホノルルではハワイ大学や東西センターでの授業。NYでは高橋幸世との「オブジェクトダンス」のワークインプログレス。オフほぼなしの半年間。昨日帰国しましたが荷物を入れ替えてマレーシアに戻り, 共同制作を再開します。11 カ国 23 都市に種を蒔き芽が出始めた活動はまだ何も終わっていません。芸術活動はすればするほど次が始まります。終わりではなく人生はいつも散らかっています。この旅でますます散らかってしまっ一生では足りなくなってしまうました。旅の間一番ホッとした時間は踊り始める 3 秒前。名もなきダンサーの身体に帰った瞬間。踊っている瞬間。世界のどこにいても身一つの最高なこと。

# The Middle East, Africa, Caucasus, Europe, Asia, Australia, and America

In Israel, I participated in a joint production and the announcement of a new production with 16 students from the Maslool Professional Dance Program, examined new students, did a solo performance and gave a lecture at the Embassy of Japan in Israel on the topic of “Japan and Israel, physical cultural differences.” In Algeria I held a week of dance classes at High Institute of Performance and Audiovisual Arts where performing arts, audio art and criticism are studied. In Georgia, I gave masterclass at the State Ballet of Georgia, National Theater, and V.Chabukiani Tbilisi Ballet Art State School, and appeared on television. In Estonia, I joined together with 13 company dancers and 3 crews, and presented my masterpiece at the Estonian National Museum in Tartu, and the Vabalaba in Tallinn. Although Japanese contemporary dance had never happened before, the tickets were sold out, and additional performances were scheduled. At the same time, Vabalaba also held Japanese cooking classes and an exhibition of Japanese photographers. In Edinburgh, I observed the International Children's Festival, and in London I visited the place where the works of a top company associated with people such as Akram Khan and Wayne McGregor are created. In Belgium, at fieldworks I created a new duo work with Kenzo Kusuda, who currently lives in the Netherlands. We also gave a trio performance at the Embassy of Japan in Belgium, with the pianist Tomoko Mukaiyama, also currently based in the Netherlands. In Spain, as well as holding a workshop in Madrid, I and company member Llon Kawai were invited to



イスラエル・マスルーレへ委嘱新作『バラード』リハーサル後のフィードバック  
Feedback after rehearsals of “Ballade,” the new work Yamada Un is entrusting to Maslool in Israel



マレーシア・サバ州にて、共同制作『People without seasons』宣材写真撮影風景  
Scenes from a promotional photo shoot for the joint production, “People without Seasons,” in Sabah, Malaysia

perform a duo work “*The Wedding*” in festivals in two cities. It was an open air performance in burning heat over 40°C. In Sri Lanka, I participated in a collaborative production and joint performance at the University of the Visual and Performing Arts, gave workshops at the Sri Lankan Armed Forces and traditional dance schools and carried out cultural exchange via “traditional dance,” observing the Esala Perahera (festival) etc. In Malaysia I made preparations for my next work. In Australia, I observed the current form of contemporary dance in there, and researched on Aboriginal arts. In Honolulu, I gave classes in the University of Hawai and the East-West Center. In New York, I worked with Sachiyo Takahashi, and our “Object Dance” is a work in progress. These last six months I have had almost no time off. I returned to Japan yesterday, but will only swap my bags and return to Malaysia, to reopen our joint production. My activities, which have sewn seeds now starting to bud in 23 cities in 11 countries, are not yet over. As soon as you do an artistic activity, the next one starts. There is no end, and my life is always all over the place. I have become more and more spread out on this trip, and one lifetime is no longer enough. While I am traveling, the time I am the most relaxed is the three seconds before I start dancing. The instant I return to being a no-name dancer. The moment I am dancing. Wherever I am in the world, these are the greatest things to me.

# 文化庁文化交流使一覧 2018年3月現在

「文化交流使」には5つのカテゴリーがあります。

1. **長期派遣型** 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行います。（平成27年度～）
2. **海外派遣型** 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成26年度実施）
3. **短期指名型** 国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体等が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行い、日本文化の普及活動を行いました。（平成20年度～平成25年度実施）
4. **現地滞在者型** 海外在住の芸術家、文化人等がその滞在国内で、それぞれの専門分野で講演、講習や実演デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成21年度実施）
5. **来日芸術家型** 公演等で来日する諸外国の著名な芸術家、文化人が、日本滞在国内を利用して学校等を訪問し、実演、講演等を行いました。（平成15年度～平成19年度実施）

平成15年度（2003年） ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

## 〈海外派遣型 — 12名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
三浦 尚之 <sup>なおゆき</sup>	音楽プロデューサー	アメリカ	平成15年7月20日～9月1日
渡辺 洋一	和太鼓奏者	アメリカ	平成15年8月15日～9月6日
田中 千世子	映画評論家	ヨルダン、スロバキア、アイスランド、ハンガリー	平成15年8月15日～12月9日
小山内 美江子 <sup>おさない</sup>	脚本家	カンボジア	平成15年8月20日～9月24日
梅林 茂	作曲家	イタリア	平成15年8月27日～11月8日
国本 武春*	浪曲師	アメリカ	平成15年9月12日～平成16年8月10日
パロン吉元	漫画家	スウェーデン	平成15年9月22日～11月21日
三谷 温 <sup>おん</sup> *	ピアニスト	クロアチア	平成15年9月27日～平成16年5月14日
笑福亭 鶴笑 <sup>わくしやう</sup> *	落語家	タイ、イギリス	平成15年12月1日～平成16年1月15日、平成16年3月30日～平成17年3月29日
小宮 孝泰*	俳優	イギリス	平成16年1月16日～5月11日
平野 啓一郎*	作家	フランス	平成16年2月28日～平成17年2月27日
四方田 犬彦 <sup>よもた</sup> *	映画評論家	イスラエル、セルビアモンテネグロ	平成16年3月15日～12月20日

## 〈現地滞在者型 — 4名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
高岡 美知子*	答礼人形研究家	アメリカ	平成16年3月1日～平成17年2月28日
松本 直み <sup>なお</sup> *	舞台照明研究家	フィリピン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ラーシュ・ヴァリエ*	詩人、スウェーデン議会国際課長	スウェーデン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ローチャン由理子*	画家	インド	平成16年3月1日～平成17年2月28日

## 〈来日芸術家型 — 5組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
ソレダット	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成15年10月15日	代々木高等学院
ケント・ナガノ	指揮者	アメリカ	平成15年10月30日	品川区立立会小学校
ルノー・カブソン	ヴァイオリニスト	フランス	平成16年1月7日	東村山老人ホーム
クリスティアン・アルミンク	新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督	オーストリア	平成16年1月14日	墨田区立両国中学校
ディビット・バイヤット	ホルン奏者	イギリス	平成16年3月15日	福岡市立舞鶴中学校

平成16年度（2004年） ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

## 〈海外派遣型 — 5名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
北村 昭斎 <sup>しやうさい</sup>	重要無形文化財「螺鈿」(各個認定)保持者	ドイツ	平成16年6月2日～7月10日
杉本 洋 <sup>おし</sup>	日本画家	カナダ	平成16年9月1日～11月30日
橋口 譲二*	写真家	ドイツ	平成16年12月13日～平成17年12月12日

井上 廣子*	造形作家	オーストリア	平成17年1月10日～平成18年1月9日
宮田 まゆみ	笙演奏家	ギリシャ, イタリア, フランス, ドイツ, ルクセンブルク	平成17年2月1日～2月28日

### 〈来日芸術家型 ― 5組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
イシュトヴァーン・コロッシュ	オルガニスト	ハンガリー	平成16年6月12日	桜美林大学
エムパイヤ・プラス	金管五重奏	アメリカ	平成16年6月14日	神戸市立港島小学校
フランソワ・ルルー	オーボエ奏者	フランス	平成16年10月5日	長崎市立山里小学校
カール・ライスター	クラリネット奏者	ドイツ	平成16年10月19日	名古屋市立見付小学校
デニス・マトヴィエンコ	バレエダンサー	ウクライナ	平成17年3月3日	品川女子学院高等部

### 平成17年度 (2005年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

#### 〈海外派遣型 ― 5名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
河村 晴久	能楽師	アメリカ	平成17年4月14日～5月25日
村井 健	演劇評論家	ロシア	平成17年5月3日～6月9日
神田 山陽*	講談師	イタリア	平成17年9月1日～平成18年8月31日
平田 オリザ	劇作家, 演出家	カナダ, アメリカ	平成18年1月3日～3月31日
Ikuo 三橋*	演出家	フランス, ベルギー, モロッコ, マダガスカル	平成18年1月15日～12月14日

#### 〈現地滞在型 ― 2名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
杉 葉子	女優	アメリカ	平成17年5月2日～10月31日
本名 徹次*	指揮者	ベトナム	平成17年11月17日～平成18年11月16日

#### 〈来日芸術家型 ― 6組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成17年6月15日	東京国際学園高等部
アンヘル・コレーラ	バレエダンサー	スペイン	平成17年7月24日	六本木ヒルズ
ソレグッド	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成17年7月25日	愛知県立明和高等学校
10人のミラクル・トランベッター TEN OF THE BEST	トランペット・アンサンブル	ドイツ	平成17年12月11日	秋田県立勝平養護学校
ラルス・フォークト	ピアニスト	ドイツ	平成18年2月6日	東京都立芝商業高等学校
日豪ジャズオーケストラ参加 オーストラリア・ミュージシャン	ジャズオーケストラ	オーストラリア	平成18年3月20日	広島県立尾道北高等学校

### 平成18年度 (2006年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

#### 〈海外派遣型 ― 9名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
寺内 直子	神戸大学教授 日本の宮廷音楽・雅楽の研究及び演奏	アメリカ	平成18年8月28日～平成19年3月30日
源田 悦夫	九州大学教授メディア芸術・情報デザイン	中国, 韓国	平成18年8月31日～10月25日
川井 春香	華道家	スウェーデン, スペイン, イタリア, フランス	平成18年9月12日～12月15日
勝美 巴湖*	日本舞踊家	イギリス	平成18年12月26日～平成19年7月15日

坂手 洋二*	劇作家, 演出家	アメリカ, フランス, ドイツ	平成19年2月5日～4月13日
桂 小春園治	落語家	アメリカ	平成19年2月6日～3月10日
豊澤 富助	人形浄瑠璃文楽	イギリス, ドイツ, スイス, イタリア	平成19年2月26日～3月28日
寺井 栄*	能楽師 (能楽観世流シテ方)	オーストラリア	平成19年3月5日～5月30日
小林 千寿*	囲碁棋士	オーストリア, スイス, ドイツ, フランス	平成19年3月14日～平成20年3月13日

#### 〈現地滞在者型 ―― 1名〉

氏名/団体名	プロフィール	活動国	活動期間
大坪 光泉*	華道家	中国	平成18年9月15日～平成19年9月14日

#### 〈来日芸術家型 ―― 9組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
アドリエル・ゴメス・マンスール	ピアニスト	アルゼンチン	平成18年4月24日	大分県日出町立日出小学校
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成18年6月20日	NPO楠の木学園 (横浜)
ジョン・ナカマツ	ピアニスト	アメリカ	平成18年7月10日, 11日	新潟県立新潟盲学校, 新潟県立上越養護学校
ペーター・シュミードル	クラリネット奏者	オーストリア	平成18年7月14日	北海道立真駒内養護学校
エミリー・バイノン	フルート奏者	オランダ	平成18年7月22日	上甕老人福祉センター
ヴォルフガング・シュルツ	フルート奏者	オーストリア	平成18年8月26日	草津町立草津中学校
オーブリー・メロー	舞台演出家, オーストラリア国立演劇学校校長	オーストラリア	平成18年9月28日	東京都立富士高等学校
ツェンド・パット・チョローン	モンゴル国立馬頭琴交響楽団芸術監督・指揮者	モンゴル	平成18年10月13日, 20日	相模原市立若松小学校, 板橋区立志村第四小学校
フランツ・リスト室内管弦楽団	管弦楽団	ハンガリー	平成19年1月18日	北海道帯広養護学校

#### 平成19年度 (2007年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

#### 〈海外派遣型 ―― 9名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
立松 和平	作家	中国	平成19年4月27日～5月26日
三浦 友馨	華道家	中国	平成19年8月1日～9月28日
名嘉 睦稔	画家	韓国, フランス, スペイン	平成19年8月30日～11月13日
本間 博*	将棋棋士	フランス, イギリス, ドイツ, スペイン, モナコ	平成19年8月30日～平成20年5月29日
中村 享	盆栽作家	カナダ	平成19年9月5日～10月6日
円田 秀樹*	囲碁棋士	ブラジル, 中南米諸国, アフリカ	平成19年10月2日～平成20年7月1日
湯山 東	画家	フランス, チェコ, ドイツ	平成19年11月2日～12月19日
桂 かい枝*	落語家	アメリカ	平成20年3月31日～10月1日
橘 右門*	寄席文字書家	イギリス, ドイツ, ハンガリー	平成20年3月31日～平成21年2月16日

#### 〈来日芸術家型 ―― 7組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
セルゲイ・ナカリャコフ	トランペット奏者	フランス	平成19年4月17日	大分県日田市立桂林小学校
ファジル・サイ	ピアニスト	トルコ	平成19年7月11日	渋谷区立小学校
イアン・バウスフィールド	トロンボーン奏者	イギリス	平成19年7月14日	札幌市立札幌小学校
チェコ少年少女合唱団	合唱団	チェコ	平成19年7月30日	北九州市立穴生中学校
アントニー・シビリ	ピアニスト	アメリカ	平成19年8月23日	群馬県立西邑楽高等学校
イングリット・フリッター	ピアニスト	イタリア	平成19年9月29日	滝乃川学園一橋大学
ニコラ・ルーツェヴィチ	チェロ奏者	クロアチア	平成20年3月18日, 19日	北海道音更高校中札内文化創造センター

平成20年度（2008年） ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
島田 雅彦	作家	アメリカ, 韓国	平成20年7月1日～平成21年3月31日
千 宗屋*	茶道家	アメリカ, フランス, イタリア, イギリス, ドイツ, モナコ, メキシコ, ベルギー	平成20年7月31日～平成21年6月30日
梅若 猶彦	能楽師（シテ方）、静岡文化芸術大学教授	フィリピン	平成20年8月2日～9月8日
小林 千寿	囲碁棋士	フランス, オーストリア, ドイツ, スイス, イギリス	平成20年8月27日～平成21年3月26日
中川 衛	重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者	アメリカ	平成20年9月8日～10月20日
常磐津 文字兵衛	常磐津三味線奏者, 作曲家	韓国	平成20年9月27日～10月27日
福田 栄香(千栄子改め)	地歌箏曲演奏家	フィリピン, インドネシア, マレーシア	平成21年2月17日～3月16日
須田 賢司*	木工芸作家	ニュージーランド	平成21年3月22日～5月4日

〈現地滞在者型 ― 2名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
上野 宏秀山*	尺八奏者	シンガポール	平成21年2月1日～4月30日
ブーイ 文子*	茶道家	タイ, インド	平成21年2月1日～4月30日

〈短期指名型 ― 5組〉

団体名	分野	在住国	活動期間	備考
財団法人日本伝統文化振興財団 狂言		インドネシア	平成20年9月3日, 5日	山本東次郎家, 狂言公演
舞踊集団菊の会	舞踊（邦舞）	ブラジル	平成20年9月16日, 25日	
太神楽曲芸協会	太神楽曲芸	カンボジア	平成20年12月3日	
鬼太鼓座	和太鼓	ブラジル	平成20年12月16日	
大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」 ロンドン公演実行委員会	歌舞伎	イギリス	平成21年3月26日	

平成21年度（2009年） ○派遣順

〈海外派遣型 ― 10名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
有野 芳人	将棋棋士	中国	平成21年5月27日～8月9日
青木 紳一	囲碁棋士	オランダ, オーストリア, ドイツ, スロバキア	平成21年7月24日～12月27日
喜瀬 慎仁	三線奏者	フィリピン, 中国, フランス, ドイツ, イギリス	平成21年8月1日～平成22年1月31日
鶴賀 若狭掾	重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者	イギリス, アイルランド, オランダ, ベルギー	平成21年9月14日～10月29日
竹本 千歳大夫	人形浄瑠璃文楽	チェコ, ドイツ, オーストリア	平成21年9月24日～10月24日
蜂谷 宗苾	香道家元後継者	フランス, 中国, モナコ, イタリア, ドイツ, バーレーン, アメリカ, シンガポール, フィンランド	平成21年9月30日～平成22年3月24日
武岡 翠篁	竹工芸家	ドイツ	平成21年10月11日～11月17日
伊部 京子	和紙造形家	アメリカ, エジプト	平成21年11月3日～平成22年3月3日
久保 修	切り絵画家	アメリカ	平成21年12月30日～平成22年3月26日
三橋 貴風	尺八演奏家	韓国, ブラジル	平成22年2月5日～3月23日

〈現地滞在者型 ― 1名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
澤崎 琢磨	和太鼓奏者	パラグアイ, ブラジル	平成21年8月1日～10月31日

〈短期指名型 ― 5組〉

団体名	分野	活動国	活動期間	備考
NPO法人和文化交流普及協会	伝統芸能（獅子舞, 津軽三味線, 和太鼓等）	ウルグアイ	平成21年9月7日, 8日	
猿楽會	狂言	オーストリア	平成21年10月13日	
社団法人落語芸術協会	落語	カンボジア	平成21年11月25日	
株式会社オフィスK2	和太鼓	ウズベキスタン	平成22年1月23日, 24日, 26日	和太鼓「婢弥鼓」
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成22年2月22日	

平成22年度（2010年）○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 12名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
黛 まどか	俳人	フランス, イギリス, ルーマニア, ベルギー	平成22年4月24日～平成23年3月25日
いわみ せいじ*	漫画家	シンガポール, マレーシア, 韓国, イギリス	平成22年8月4日～平成23年7月31日
藤間 万恵*	日本舞踊家	中国	平成22年9月4日～平成23年7月16日
佐々木 康人	華道家	ベトナム, シンガポール, タイ, マレーシア	平成22年9月9日～11月14日
巖輪 敏泰	和太鼓奏者	メキシコ	平成22年9月20日～10月26日
笑福亭 銀瓶	落語家	韓国	平成22年9月30日～10月31日
山村 浩二	アニメーション作家	カナダ	平成22年11月12日～12月19日
安田 泰敏	囲碁棋士	オーストリア, スイス, フランス, ロシア, ヨルダン, イスラエル, モロッコ	平成22年11月15日～平成23年2月28日
野田 哲也	版画家	イスラエル, イギリス	平成22年12月3日～平成23年1月17日
山内 健司	俳優	フランス, スイス, ベルギー	平成23年1月7日～3月31日
澤田 勝成	津軽三味線奏者	中国	平成23年2月20日～3月20日
津村 禮次郎*	能楽師	ロシア, ハンガリー	平成23年2月24日～4月9日

〈短期指名型 ― 4組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会	沖縄舞踊	メキシコ	平成22年10月19日
財団法人日本余暇文化振興会	津軽三味線	メキシコ	平成22年10月23日
有限会社アトリエ・アサクラ	日本舞踊	韓国	平成22年10月28日, 29日, 11月1日, 2日
金春流能ドイツ巡回公演実行委員会	能	ドイツ	平成23年1月20日, 28日

平成23年度（2011年）○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 6名・1グループ〉

氏名/グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
真鍋 尚之*	雅楽演奏家, 作曲家	ドイツ, フランス, オーストリア, スウェーデン, ロシア, ベルギー, オランダ, イタリア, スイス, ベラルーシ, チェコ, セルビア	平成23年5月14日～平成24年5月13日
時友 尚子	染色家	エストニア, ラトビア, リトアニア, フィンランド	平成23年10月26日～11月25日
薄田 東仙	書道家, 刻字家	イスラエル	平成23年10月27日～12月4日
辰巳 満次郎*	能楽師	韓国	平成24年1月9日～4月19日
AUN (井上良平, 井上公平, 齋藤秀之)	和楽器奏者	タイ, ラオス, ベトナム, カンボジア	平成24年1月21日～2月25日
塩田 千春	現代美術家	オーストラリア	平成24年2月7日～3月7日
佐佐木 幸綱*	歌人	ドイツ, ポーランド, スイス, フランス, オランダ	平成24年3月8日～6月4日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
こつん 話傳の会	人形浄瑠璃文楽(素浄瑠璃)	ドイツ	平成23年9月26日
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成24年2月21日
特定非営利活動法人ACT.JT	伝統芸能, 大衆芸能	アメリカ	平成24年3月26日～28日

平成24年度(2012年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名・1グループ〉

氏名/グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
あのぼと ふゆき 榎戸 二幸	生田流箏曲	ドイツ, オーストリア, イギリス	平成24年5月28日～8月31日
うるまでるび(うるま, でるび)*	アニメーション・アーティスト	アメリカ	平成24年9月2日～平成25年8月31日
もとむらこ 茂山 宗彦*	大蔵流狂言師	チェコ, オーストリア, ルーマニア, リトアニア, ポーランド	平成24年10月3日～平成25年7月3日
矢崎 彦太郎	指揮者	アルジェリア	平成24年12月6日～平成25年3月16日
あまほら ろげん 海老原 露巖	墨アーティスト, 書道家	イタリア	平成25年1月20日～2月23日
よしかず 藤本 吉利	和太鼓奏者	中国	平成25年1月21日～2月21日
小島 千絵子	民俗舞踊家	スペイン, ポルトガル, ベルギー, イギリス	平成25年1月21日～3月11日
やまじ 山路 みほ*	箏曲演奏家	ロシア, ドイツ, イタリア, スイス, スロベニア, オーストリア, スロバキア, フィンランド, ラトビア, ハンガリー	平成25年1月27日～6月30日
大澤 奈留美*	囲碁棋士	アメリカ, ブラジル	平成25年3月14日～5月13日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
くろもりかぐら 黒森神楽アメリカ公演実行委員会	伝統芸能, 大衆芸能	アメリカ	平成24年10月31日
コンドルズ	舞踊	タイ	平成25年3月1日
公益財団法人せたがや文化財団 演劇		アメリカ	平成25年3月25日

平成25年度(2013年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
土佐 信道	明和電機社長, アーティスト	フランス	平成25年6月3日～7月11日
まさし 平尾 成志	盆栽師	リトアニア, イタリア, フランス, オランダ, アメリカ, メキシコ, オーストラリア, ドイツ, トルコ	平成25年6月11日～10月24日
たけふらうん 武田 双雲	書道家	ベトナム, インドネシア	平成25年7月31日～8月31日
えんろう レナード 衛藤*	和太鼓奏者	スイス, フランス, イタリア, チュニジア, ポルトガル, インド, オランダ, ドイツ, ハンガリー	平成25年8月8日～平成26年7月23日
森山 開次	ダンサー, 振付家	インドネシア, ベトナム, シンガポール	平成25年10月18日～12月3日, 平成26年1月4日～19日
はさだ 挟土 秀平	左官技能士	アメリカ	平成25年10月19日～11月30日
みらい 森山 未来*	俳優, ダンサー	イスラエル, ベルギー, イギリス, スウェーデン, ドイツ, ロシア	平成25年10月21日～平成26年10月20日
長谷川 祐子*	キュレーター(学芸員), 大学教授	アラブ首長国連邦, ドイツ, モロッコ, フランス, アメリカ, モナコ, アルメニア, グルジア, スウェーデン, ベルギー, イギリス, イタリア, 中国, チェコ, ハンガリー, スイス, ロシア, ポルトガル	平成26年3月12日～7月14日

〈短期指名型 ― 6組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
びいまるど 藝〇座	伝統芸能（日本舞踊）	スペイン	平成25年9月19日, 28日
チェルフィッチュ	演劇（現代演劇）	ギリシア	平成25年10月31日, 11月2日
小野雅楽会	伝統芸能（雅楽）	ロシア, ドイツ	平成25年11月12日, 14日, 18日
株式会社わらび座	舞踏（民族舞踊）	ベトナム	平成25年12月19日, 26日
山海塾	舞踊（舞踏）	インド	平成26年1月15日, 16日
声明の会・千年の聲	伝統芸能（宗教音楽）	アメリカ	平成26年3月7日

平成26年度（2014年）○派遣順

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
中澤 弥子	食文化研究者, 長野県短期大学教授	フランス, ドイツ, ポーランド, ハンガリー, イタリア, スロバキア, イギリス	平成26年8月10日～10月13日
林 英哲	太鼓奏者	アメリカ, トリニダード・トバゴ, キューバ	平成26年9月25日～11月4日
林田 宏之	CGアーティスト	クウェート, ヨルダン, レバノン, サウジアラビア, バーレーン, ベトナム, タイ	平成26年11月1日～12月14日
若宮 隆志	「彦十蒔絵」代表	イギリス, フランス, 中国	平成26年11月2日～12月3日
平野 啓子	語り部, かたりすと	ドイツ, トルコ	平成26年11月14日～12月15日
櫻井 亜木子	琵琶演奏家	エルサルバドル, ブラジル, アメリカ, イギリス, イタリア, スイス, アルバニア	平成27年1月7日～3月21日
岡田 利規	演劇作家, 小説家	中国, 韓国, タイ	平成27年1月12日～3月2日
山井 綱雄	金春流能楽師	フランス, アメリカ, カナダ	平成27年2月1日～3月15日

平成27年度（2015年）○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈長期派遣型 ― 7名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
青木 涼子	能×現代音楽アーティスト	アイルランド, フランス, ドイツ, デンマーク, イギリス, ハンガリー, イタリア	平成27年6月20日～8月9日, 9月17日～11月1日
柳原 尚之	近茶流嗣家, 「柳原料理教室」副主宰	ニュージーランド, ブラジル, カナダ, アメリカ	平成27年7月29日～9月20日, 9月28日～11月8日
矢内原 美邦	振付家, 劇作家, 近畿大学文学部芸術学科舞台芸術専攻准教授	シンガポール, マレーシア, 韓国, タイ, ミャンマー, ベトナム, アメリカ, インドネシア, フィリピン	平成27年8月22日～平成28年1月31日
畠山 直哉	写真家	メキシコ, インド, フランス	平成27年9月2日～平成28年2月10日
小野寺 修二	コンテンポラリーダンス, マイム, 「カンパニーデラシネラ」主宰	ベトナム, タイ	平成27年12月15日～平成28年1月27日
藤田 六郎兵衛	能楽笛方 藤田流十一世宗家	イギリス, フランス, 韓国	平成28年2月23日～3月30日
吉田 健一*	「吉田兄弟」, 津軽三味線奏者	オランダ, スペイン, イタリア, ポルトガル	平成28年3月27日～5月25日*

平成28年度(2016年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動

〈長期派遣型 ― 6名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
佐藤 可士和*	クリエイティブディレクター	アメリカ, イギリス, フランス	平成29年3月18日～4月17日
佐野 文彦*	建築家, 美術家	イタリア, デンマーク, ベルギー, フランス, オランダ, アイスランド, ドイツ, 韓国, マレーシア, フィリピン, 中国, インド, エチオピア, メキシコ, アメリカ, インドネシア	平成28年8月20日～平成29年5月10日
土佐 尚子*	アーティスト, 京都大学教授	イギリス, 韓国, フランス, アメリカ, シンガポール, タイ, フィリピン, ニュージーランド	平成28年10月27日～平成29年4月30日
藤間 蘭黄*	日本舞踊家	アメリカ, チェコ, ウクライナ, ポーランド, ハンガリー, スロベニア, フランス, ロシア, ドイツ, イタリア	平成29年3月29日～7月25日
柳家 さん喬	落語家	アメリカ, カナダ	平成29年2月5日～3月6日
山田 うん*	振付家, ダンサー	イスラエル, ジョージア, エストニア, アルジェリア, イギリス, ベルギー, スペイン, スリランカ, マレーシア, オーストラリア, アメリカ	平成29年3月29日～9月30日

平成29年度(2017年) ○派遣順 \*印は、次年度も引き続き活動(予定も含む)

〈長期派遣型 ― 5名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
大友 良英	音楽家	アルゼンチン, チリ, ブラジル, メキシコ, アメリカ, イタリア, フランス	平成29年10月31日～12月13日, 平成30年2月2日～2月15日
鈴木 康広	メディアアーティスト, 武蔵野美術大学准教授, 東京大学先端科学技術研究センター客員研究員	アメリカ, カンボジア, ドイツ, アイスランド	平成30年2月12日～3月16日
種田 道一	金剛流能楽師	アメリカ, フランス, スペイン, イタリア, ハンガリー	平成30年1月20日～3月15日
本條 秀慈郎*	三味線演奏家	トルコ, アメリカ, ブラジル, イタリア, フランス, イギリス, フィンランド, チェコ, ドイツ, スペイン, ロシア	平成30年3月12日～10月16日
増田 セバスチャン*	アートディレクター, アーティスト	オランダ, 南アフリカ, アンゴラ, アメリカ, ボリビア, ブラジル	平成29年9月21日～平成30年4月1日

◎ 編集について

・文化交流使による活動報告は、筆者本人の表現を尊重しており、公文書上の表記方法等とは異なる場合があります。

◎ Note

- We respect the right of Japan Cultural Envoys to express themselves individually in presenting these activity reports, so please be aware that the terminology used may not necessarily follow official guidelines.

---

文化庁文化交流使フォーラム 2017 - 第 15 回文化庁文化交流使活動報告会 -

主催：文化庁

Japan Cultural Envoy Forum 2017

Host: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

